

# 水

日名子 紗綾

## 深海スイミング

プールの水が温水に替わる頃、道端の金木屋が咲きま  
す。その道はいつも通るのですけど、気づかないうちに  
その木の下にオレンジのカーペットが敷かれているので  
す。私の足がカーペットになったオレンジの花々を踏み  
しめると、強い香りが辺りに湧き出します。夕陽の間で  
あったなら、私までもオレンジになっているのではよ  
う。

「セツナ」

お父さんが私の名前を呼びました。いつもの、スイミ  
ングスクールに行く時間だからです。もう少し金木屋の  
下で遊んで、一番綺麗な花びらを探したり、集めた花び  
らを水に漬けて色水を作ったりしたいところですが、呼

ばれたら素直に切り上げます。私は大人に逆らうことを  
知らないまだ幼い子どもでしたから。

私がちゃんと後部座席に座ったことを確認して、お父  
さんも運転席に座ってベルトを締めると発車しました。  
背もたれにもたれかかって、窓を見れば、外の景色が映  
り変わっていくのが見えます。車から見る景色は全部テ  
レビの中のようなです。私が触れることのないまま流れて  
行き、誰もがここから同じ景色を見ることができない。い  
え、正確には全く同じではないのでしょうか。私はついこ  
の前、知ったのです。

雨の日に、部屋で紙飛行機を作って遊んでいました。  
その時に頑張って飛ばし過ぎて、大きな棚の上に紙飛行  
機が消えてしまいました。まだリビングのテーブルから  
頭一つ出るくらいしか背の高さがなかった私には、棚の

上がどうなっているかなんて全く分かりません。イスからテーブルへと移って、その上に立ってやっと大きな棚の上を見ることができました。それは、私の知らない世界でした。棚の上には色々な箱が置いてありました。きらきらとラメが付いた箱、真っ黒の細長い箱、丸い四角いの……そして、一番奥の紫の小箱の上に私の紙飛行機が白くぼつんと乗っかっていました。私はこの時、見える世界の違いに気がついたのです。私より背の高い人は皆、私の見えないものがたくさん見えているのです。それは、この車窓から見える景色も同じことなのではないのでしょうか。

「着いたぞ」

お父さんの声を聞いて、気づけば車が駐車場に止まっています。私は車の後ろのドアを開けて、カバンを肩に引っかけて外に出ます。お父さんは、車の中で「いつてらっしゃい」という風に手を振ってくれました。それを見てから、スイミングスクールのプールへ向かいました。

建物に入れば、もうプールの喧噪が聞こえて来ます。

「いち、にー、さん、しい」と準備体操をする声や、「クロールはじめっ」といった掛け声です。私はそれを遠くに聞きながら水着に着替えます。それから準備体操に参加するため喧噪の中に混じるのです。

「セツナちゃん。今日、帰り、お父さん？」

右足の太股を伸ばしている時に隣の子が話しかけてきました。準備体操は同じ時間帯で泳ぐ子達が一緒に、今日の担当の先生の掛け声の下で行います。体操中のこういったお喋りは注意されることもあります。今日は先生は大目に見てくれる人のようです。

「うん」

それでも、私は注意されるのが怖くて小声で答えました。隣の子は気にせず、次は左足の太股を伸ばしながら言います。

「わたし、今日ひとりなの。帰りはバス。それで、お母さんが友達と一緒に食べなさいってお金くれたから、今日終わったらアイス食べよ」

アイスというのは、この建物内にあるアイスクリームの自販機のことです。入り口近くにあるその自販機は、ご褒美として親が子どもによく買ってくれます。私はその自販機にあるチョコチップのアイスクリームが大好きでした。

「わかった、ありがと」

私はさっきよりも少し大きな声で答えました。終わったあとにアイスがあるなら、もっと頑張れます。この頃の私はずっと同じところをプールで泳ぎ続けることに飽きてきていました。

準備体操が終われば、体の下から順々に水をかぶってからプールに行きます。すぐに水に浸かるのは心臓に悪く危険だと聞かされていました。それに、今思えば消毒の意味もあつたのでしょう。同じプールに入って同じ感染症にかかる恐れがあります。プールで泳ぐ我が子を見守っているお母さん達が「とびひ」「とびひ」という言葉をお口にしているのが耳に入ったことがあります。私はその時、頭の中に線香花火を思い浮かべたのでした。ひよろりとした線の先に吸いつく火の玉。そこからチリチリと飛び出す火の粉。実のところ、お母さん達は夏の思い出ではなく、感染症について話し合っていたのです。

そうしたいつもの準備を終えてから、やっとプールに入ります。プールは室内にあり、温水になっていて、肌寒くなってきた秋でもとても心地が良いので、プールサイドに在るよりは早く中に入ってしまいたいとはやる気持ちになります。

「今日はクロール三本から始めます！」

ピイと吹く先生の笛の音が、プールの他の人達の声と一緒にわんわんと反響しました。壁にある大きな時計の青い針が十二と六のところに来た時に、笛が鳴ります。

そのたびに私の前の人から順番にプールに飛び込みます。一人目、二人目、三、四、五番目が私です。飛び込

み台の上に立てば、プールの端が遠くに感じますが泳げばすぐです。先生が笛を口に当てると、青い針が六のところと近づくのを横目に見てから、頭を下に向けました。しっかり伸ばした両腕で頭を挟んで、その先で両の掌を重ねると、腰を落として笛の音を待ちます。

「ピッ」

私は伸び上がって、前の方へずりりと飛び込みました。うわんとプールの全ての喧嘩が遠のいて、水のはねる音にかき消されます。一瞬で、水中に体が沈んで、プールの中の床に引かれた白い点線が見えました。これを真っ直ぐたどることが私のやることです。私を下に押ししていた水は、すぐ私の体を水面へ吐き出します。私は両足でばたばたと交互に水を叩いて、同時に頭の横にあつた両腕の片方を後ろに払ってから水の上を抜いて、体が少し横に傾くので顔も横にして水面に出た口で息を吸います。顔を水の中に戻しながら上げた片腕を前へ、水中に差し込みます。また両腕が頭の横にそろったかと思えば、すぐにさつきとは反対の腕を同じように水中から抜くのです。こうして交互に腕を抜いては顔を出して息を吸い前へ、前へ、足を動かすのも忘れずに進んでいけばプールの端はあつと言う間です。話せば複雑な動きのようには思えますが、泳いでいる時に私はただ進むことしか考えずに、覚え込んだ動きを繰り返していました。で

も、このごろは考えることが増えています。

例えば、隣のコースを泳いでいる人達が私より速く通り過ぎていくこと、とか。そんな時、水がかき分けられ私の周りを流れているのは、私が泳いでいるからではなく水が私を流していくからのように思えました。そんなことは決してないのですけれども。プールには海のように波はないのです。そう、ここは海ではないと思いつつて、物足りなくなっていくます。プールの端に着いたら水中でターンをしてもう一度同じコースをたどるだけの、分かり切った箱の中。

とても長い間、私はここを泳いでいると思いつつてました。本当は、私は海で泳ぎたいのに。海の底を目指してどこまでも潜って行きたい。でも、ここは底なんてすぐ堅い床におつかるだけです。海の底なら、水中で岩に生えた海藻の間に魚を見つたり、砂に埋まった瓶を拾い上げられるのに。そう思っていますと、顔をあげて息を吸う時に見える、各コースを仕切る水面に浮いた黄色いブイの連なりが、黄色い魚の群れに見えました。ブイに等間隔に結び付けられた赤い小さな旗は、平べったい赤い魚です。じゃあ、プールの床に引かれた白い点線は、小さな白魚の群れなんじゃないかしら。ああ、ここは海になるのだと思えました。水がはねる音なんかより、潜って呼吸の音を聴いていたい、と欲が出ます。ちょうど

プールの端が来て、水中で頭をだき抱えるように体を丸めてくるりと一回転しました。そして体をひねりつつプールの壁を蹴ってまた前へ進むのですが、私は深い海の底を目指したのです。

海の底に行く時、思いっきり勢いをつけて潜らなければ、ゼリーにおつかるみたいに水に押し返されてしまいます。私はちゃんと水に刺さっていく鋭い魚になって、水の中へ切り込んで行きました。ぐわん、ぐわん、と耳の中から外の音が取られていって、私の心臓と鼻から抜ける気泡の音だけが大きくなっていきます。この海の底には大きな深い亀裂が入っていました。もしかすると、地球の中心まで続く深い穴なのかも知れません。いつかテレビで見たように、そんな深いところには奇妙な生き物がたくさんいるのでしょう。私は恐れることなく亀裂の中へ入って行きました。この中には私の知らないもので溢れているに違いありません。

少し進めば、夏祭りの灯りと同じオレンジの光がぼよよといくつも浮かんで来ました。よく見ると丸く小さな風船の中心でオレンジが光っているのです。その風船達は私とは反対に上へ上へと浮かびます。私は潜水の途中で立ち止まることができず、一気にその風船の群れを突き抜けました。立ち止まれば水は固まって私は容易に上にも下にもいけなくなるでしょう。突き抜けている間

にいくつかの風船に当たりましたが、どれもが割れることなくただ柔らかに撫でていくだけでした。風船の群れを過ぎて、急に緑の壁が目の前に現れました。アッと思った時にはもう遅く、緑の壁に大きな鱗が一つ一つ重なっていることに気づいた瞬間、頭を強かに打ちつけてしまいます。ガンツと痛い音が響いて、なんて堅いのだろうと思えました。

「大丈夫？」

ぶはあつと、水面から顔を出して息を吸います。いつものプールの端で水の中に立ってしまった私を、心配そうに先生がのぞき込んでいました。それもそのはず、私は二回目のターンに失敗してプールの壁に頭をぶつけたのです。考え事をすればこういうことをやらかします。じんじんと痛む頭を触り、なんともなっていないのを確認して頷きました。大丈夫です。痛みは確認しているうちにもう引いてきました。私は体勢を整え、最後の三本目の泳ぎを再開しました。

今度は集中して泳ぎ切ります。水をかく時も丁寧に、リズムカルに息継ぎもして。でも、頭の隅にはやはり先ほどの深海があるのでした。来年も、お父さんは私を海へ連れて行ってくれるかしら……。ゴールに到達して水面から顔を上げた時に、子ども達を見守る親達の待機所が見えます。そのプールの眺めるガラスの向こうでお父

さんの顔を見つけました。私は嬉しい気持ちで、あたたかな水から少し冷たいプールサイドに上がりました。ペタリと引く付く水着は生温かくて、またすぐに水の中に入りたくなるのですけど、今日はすぐに着替えて海の話をした気分でした。

## 耳からあふれる水

十一月の空。重い白色の雲が、青空を消して行く。田んぼ道にぼつんとあるバス停は、透明な板に囲まれた小さな待合室が付いている。雨、風、そして今、外をちらつく雪から守ってくれる。あたしはそこでサヨの耳からあふれる水をなめていた。

「どうしてそんなことするの」

昼休みの教室の喧噪の中に、剣呑な空気ができあがる。クラスみんなの目があたしとあたしの下に転がった紙コップに向いていた。それもこれも、あたしがこの不味い飲み物を床に落としたせいなんだろう。クラスのある女子が海外旅行の土産に、珍しいジュースを買ってきたのだ。ビンに入ったそれを紙コップに入れて、その女子はクラスの皆にそれを振舞った。あたしはいらないから断ろうとしたのに、ちょっと目を離れた隙に誰かがあたしの机の上にもジュースを置いていった。隣のサヨもここに顔でジュースを受け取っている。仕方なくちょっとだけ口をついたら甘ったるくて飲めたもんじゃなかった。飲み終わったサヨは変わらず笑顔だったけど、あたしには馬鹿みたいに「すごい、あまーい」と騒いでる連中に合わせてるだけに見えた。だから、嫌に

なりながら机の上に置いたのだけれど……まあそんな気分でしたら、こうなっちゃったわけだ。

「手が滑って落ちただけなんだけど」

あたしがそう言うと、はあ？という声がどこからか上がる。でも、ほんた。手が滑って落としたっていうのは本当のことだ。気づいたらコップは落下してたんだから。

「アイコちゃん、大丈夫？ 濡れてない？」

側に来たサヨが、何故か心配して机の濡れたところをハンカチで拭いていた。濡れてなんかいいよ。そんな面倒くさいことするわけない。あたしは重い腰を上げて、床に転がった紙コップを拾う。

「いいよ。服は大丈夫。不味くて飲めなかったし、手が滑ってちょうど良かった」

周りから、ざわざわと声が起こる。「まじで言ってるの？」「ふつーそういうこと言う？」「嫌な感じ」……なんて。そっちこそ嫌な声だ。あたしはそれに背を向けて、教室のドア近くのゴミ箱に紙コップを捨てた。そのまま、教室を出る。後ろから、慌てて追いかけてくるサヨの足音がした。

「待って！」

そこまで思い出しても、あたしにはサヨの言う「優し

「い」が分からない。サヨと並んで学校から帰る道、突然サヨはあたしに「アイコちゃんは優しいねえ」としみじみとした顔で言ったのだ。はあ？ といった顔をしているとサヨは「ほら紙コップ落とした時も」とさらに言う。あの昼休みの一件以降、あたしは「優しい」からずいぶん遠いところに位置しているはずだ。むしろ

「サヨの方が優しいって思われてる」

「そんなことないよ」

サヨは首に巻いたマフラーにうずめていた顔を上げて言う。

「アイコちゃんは、何でもちゃんとやってくれるんだ。それってすごく優しいなって」

あたしが特別綺麗だと思ふ微笑みを浮かべながらサヨは言う。

「わたしのことちゃんと見ててくれて、気づいてくれる優しさを持つてるのはアイコちゃんだけだから」

サヨの吐いた白い息がふわり、ふわりと消えていった。

「そーいうのは『優しい』とは違うと思うけど。ほら、サヨはよくノート貸してやったり。ああいうの」

手が、暖かそうな手袋を付けたサヨの手が、耳を触るのを見る。

「あれは。その、わたし……頼まれたらつい」

サヨの耳から目を背けて、手袋を忘れたあたしはコートのポケットに突っ込んだ両手を中で、ぐっと握った。手を動かさないと氷ってしまいそうだ。

「馬鹿だな」

上を向いても重い雲ばかりだ。ぜんぶ雪雲。遠くの山もその雪雲を被って山頂が見えない。今日にでも、雪が降り出すだろう。

「うん……ごめん」

あたしの呟いた言葉にサヨが、何故だか何でもないように「ごめん」と呟き返すものだから、眉をひそめて言うてやる。

「なんで謝るの」

サヨはちよつと驚いた顔をした。

「なんか。分かんないけど、つい」

ほんと、どうしようもないな。あたしも大きく息を吐く。

「……馬鹿」

吐いた息と言葉が消えていく前に、サヨが隣で笑った。ふへつと緩んだ柔らかな笑い方。二人の時にだけ、こんなふうに笑ってくれる。きつと、それがサヨの一番の優しいなのに。分からないな。あたしはそれを持ってない。

透明なはずのバス停の待合室のガラスが白く曇っている。それは、あたしとサヨの吐く息のせいだと思っていた。でも、よく見ればバス停の周りほとんど雪が降って来ている。本格的に降り出したようだ。ああ、風も吹いてきた。ガタガタと鳴り出している。待合室の外はずっと動いているのに、あたし達だけが何もかも止まっている。サヨの右耳から目が離せない。

「見られてるとちよつと恥ずかしい」

サヨの手が、器用に色画用紙をハサミで星形に切っていくのをじつと見つめていた。図書室の掲示板にクリスマス飾り付けをするのだ。あたしとサヨは図書委員と一緒にしている。だから、十二月が近づくと早くも図書室の司書さんがクリスマス飾り付けをして欲しい、と頼んできた。

「サヨは丁寧に切るからいいよね。あたし、これでいいかって思っちゃって」

あたしは、一個しかなかったハサミをサヨに譲って、カッターでモミの木にくり抜いていた。下書きもせずに切り始めたため、モミの木の左右のバランスが明らかにおかしい。まあ、でも一ヶ月ぐらいいしかどうせ貼らないのだと、そう思ったのだ。

「えーそれはちよつと……」

あたしの切ったモミの木を見て、さすがにサヨも呆れた声を出す。ペン回しと同じ要領でカッターをくるくる回しながら、もう一枚、色画用紙を使って作り直そうかと考える。その時、誰かがあたしに声をかけてきた。

「ねえ、アイコちゃん、だよね」

声をかけた人の方を向くが、気に食わない騒ぎたがりの女子生徒たちだった。三人組で「ねえ聞いてみなよ」と笑い合っている。この時点でなんだかむかついた。

「四組のシジくんが好きってほんと？」

何の話だ。シジ、って誰だよ。聞いたことのある名前だけだ。いや、最近どこかで見た……ああ、もしかして同じクラスなの？ そういえば体育で男子が着替える教室に忘れ物を取りに入ったことがある。あたしは男子が着替えていようと気にせず入るんだけど、急に女子が入っていきたまんだからあいづらじろ見てきて。目立ったのは仕方ないと分かっている、あたしは苛々した。そんな時に、ちょうどあたしの机の前にいた奴が邪魔でにらんでしまった。そいつ、シジって名前だった。体操服に名前が書いてあったから間違いない。普段あたしがほとんど人と接点を持たないから、ちよつとでも何かあるとこいつらは騒ぎ立てるんだ。あたしはもうそいつらの顔を見る気も起きないで、新しい緑の色画用紙を選んでカッターを握り直した。



「好きじゃない、てか誰」

ぶつり、ぶつり、と画用紙に線が切られていく。下に敷いた、いらぬ雑誌がずいぶん深く傷ついた。

「アイコちゃん」

サヨに呼ばれてハッとすると、画用紙に余計な線が増えていく。女子生徒たちは怯えたように逃げ去って行った。

「ダメだよ、机に傷がついちやう」

静かになると、カバンの中のカチャカチャと鳴る筆箱の音がよく聞こえて、あの時のカッターを間違えて筆箱に入れたまま返すのを忘れていたことを思い出す。そのことをサヨに言うと、明日の昼休みに一緒に返しに行こうという話になった。

「昼ね……サヨの弁当、なんとかなんないの」

「うーん、でもお母さん忙しそうだし」

隣を歩くサヨがまた右耳を触って、耳たぶを引っ張って放してをしている。

「もう購買でパンとか買えばいいのに」

「でもさ、せっかく作ってくれたんなら食べないと申し訳なくて」

遠くで救急車のサイレンの音が鳴り始めた。近づいたり離れたたり、どこにあるのかはわからない。その音が気

になるのか、サヨが辺りを見回す。見晴らしの良い田んぼ道でも、行く先にある住宅街の中はどうなっているか分からない。

「今度は箸が無かったんでしょ。それであたしの貸すはめになったし」

サヨの母親は、仕事が忙しくて帰ってくるのも真夜中だ。でも朝は弁当を作って置いてくれる。それが今日みたいに箸を入れ忘れたり、サラダに味付けもドレッシングも無かったり、凄く不味い冷凍食品の一品が入っていたり、とにかく毎回何かしかの問題があるのだ。しかも、それらのことをサヨが母親に言わないものだから、いつまで経っても解決しない。

「うん。今日はお箸、貸してくれてほんとにありがとう」

へへっと笑ってサヨが口元のマフラーをぎゅっと握る。

「そーいうことじゃなくて」

あたしがサヨに、なんでって言おうと思った時、あたし達の間を強い風が駆け抜けた。あたしは首のマフラーの端が顔にかかったので取り払う。サヨは舞い上がるスカートの前を押さえた。

「うわあ、すごい風」

「はあ……雪起こしってやつじゃない」

あたしがぼつりと言った言葉がそのままになる。サヨは風が通り過ぎて行った前を見たまま、ぼおつとしていた。独り言だと思ったのかも知れない。でも、なんだか違和感があった。そつと右耳に手を当てるサヨ。

「……サヨ」

あたしが左にいるサヨに声をかけたのは、強風の中じやない、ひゅうひゅうといつもの冬のかすれた風が鳴る時だ。

「え」

振り返る顔には純粹な驚きしか見えない。

「何か言った？」

また救急車のサイレンの音が聞こえ始めた。近づいているのか、遠ざかっているのか、相変わらず分からないう。あたしは、サヨの右腕を引いた。

誰もいないバス停の待合室、という言葉が浮かぶ。それはおかしい。あたしは確かに、サヨと二人つきりでここに存在しているのだ。なのに、なんだかあたし達はこの待合室の中の空気の一部になったような気がしていた。だから誰もあたし達を気にもとめないのだ。サヨの右耳からしとしと落ちていく透明な液体も、誰も。待合室の明かりを反射して光る、こんな綺麗な水なの

「これ、のんでもいい？」

幼いサヨとあたしが雨上がりの道路で遊んでいた。アスファルトの所々に水溜りができていて、それをのぞくと青空が見える。そこで、プラスチックの子ども用のコップを持っているサヨが水溜りの水を汲んでいるので、あたしはそれを指して言った。

「うん、サヨがジュース屋さんね」

と、笑顔でコップを差し出しサヨは言う。あたしはうなづいて、そのコップを受け取った。でも、のぞいて見てもコップの中には青空は無く、幼いあたしの顔が映っているだけだ。

「やっぱいらぬ」

あたしがコップをそのままつき返す。

「おいしくなかった？ じゃあ、もつとすごい、クロバーいれてあげる」

サヨはそう言ってクロバーを探しに走って行ってしまった。あたしは散らばる水溜りをふらふら眺める。すると、その中に一つだけ虹色の水溜りを見つけた。オーロラの折り紙みたいなきれいな、特別なやつだ。

「……おいしそう」

あたしはそれに手を伸ばすと、指をつけて口までもっていった。

「アイコちゃん！ それだめ！」

あたしがその虹の水をなめるのと、サヨが止めに来るのは同時だった。カコンツとコップが転がるのが見えた瞬間、あたしの口の中は最悪な味だった。おまけに石油ストーブみたいな臭いで。当然だ。あの時のあたしはまだ知らなかったが、それは車から漏れたガソリンだったのだから。でもあたしは……。こんなに綺麗なのに不味いなんておかしい。心配そうにしているサヨを見えずとそう思っていた。

「ね、だいじょうぶ？」

全然、大丈夫じゃないのに。サヨはそういうところが昔からある。人の心配ばかりして、自分のことは迷惑になるからって。あたしが耳のことを指摘すると、サヨは大丈夫、なんでもないと言った。

「ウソ。おかしいんでしょ、耳」

サヨの右腕をもっと引っ張って、耳に近づいてよく見ようとする。するとサヨは左手でマフラーを上げて耳を隠そうとした。

「そういうの、あたし嫌いだから」

あたしが強く言うと、サヨが動揺するのが分かった。

サヨの動きが止まる。

「え、あ……でも病院とか行きたくないし」

やっとなめた。サヨはあたしと目を合わせずに、ぼそ

ぼそと言いつつ。

「それに、ほっといたら治るかも。右耳だけだから。ほんとに大丈夫」

大丈夫、の時だけあたしの顔を見るが、それはあたしの機嫌をうかがっているようにしか思えなかった。

「いつから？」

「帰る前くらいから……なんだか右耳が詰まってる感じがして。触ったらちよつと」

言いよどむサヨを見て、あたしはすぐ自分の指でサヨの右耳に触れた。

「ひゃつ！ つめたつ」

サヨは冬の外で素手だったあたしの指の冷たさに驚くが、そんなこと構わない。それより、雪が降ってたわけでもないのにサヨの右耳は真冬の朝の窓ガラスみたいなの……。

「濡れてる」

「うん……なんだろ、風邪も引いてないのにちよつとおかしいなーって」

風邪なら、中耳炎か何かだろうか。でも、サヨは鼻が悪いわけでも熱があるわけでもなさそうだった。考えながらじっとその耳を見ているうちに、ぼたつと透명한何かが耳の穴から落ちた。

「あ、」

サヨも異変に気づき、耳に手を当て、首を傾げている。ぼたり、ぼたり、雫がサヨの手袋に乗っていく。それは耳の穴から落ち続けた。小さな真珠みたいな玉で水晶のように透き通っていて、肌の手袋の布にはじかれて転がる。ああ、もったいない。「え、あ、」と戸惑うサヨの声が遠く聞こえる。

「こっち」

あたしはサヨの手を引いて、少し先に見えていたバス停の待合室へ入った。もつとよく見たい。その水に、触りたい。

このバス停の待合室は、田んぼが広がる田舎には似つかわしくない新しいさだ。雨風をしのぐ屋根も透明なガラスの壁もドアもある。その青い長椅子にサヨを座らせる。

「ねえ、アイコちゃん。どうしよう、ねえ、とまらなくて。ずっと。ねえ、アイコちゃん」

サヨは動揺して、同じ言葉を繰り返していた。あたしはサヨの隣に腰掛けて、その右耳がよく見えるようにマフラーを外してやる。待合室の中はあたたかいんだから、どうせ外しておいた方がよい。あたしもマフラーを取ってから、右耳を触ろうとするサヨの手をそっとどけた。相変わらず、サヨの耳からは綺麗な水があふれ続け

ていた。そう、もうあふれるほど流れているのだ。その小さな穴から、こぼり、こぼりとあふれる水はサヨの右肩から垂れ、制服まで濡らしてしまう。すつと鼻で空気を吸い込めば、寒さが入り込むだけだった。

「大丈夫、サヨ」

あたしの声も、まだ言葉を繰り返しているサヨの声も、何だか遠い気がする。何を言っているんだろう。あたしが優しくサヨの後ろ髪をなでるとサヨが大人しくなって、すぐるようにあたしを見つめた。

「この水、とても綺麗だから」

「えっ……アイコちゃん？」

サヨの小さな声を聞き取った時には、すでに右耳に顔を近づけていた。唾を飲み込んでも、渴きは治まらない。これがあたしの中にある、どこかもつと奥深くから湧き上がる渴きだからだ。清流に口をつける気分だった、あたしがサヨの耳からあふれる水をなめたのは。

「おいしい」

堪らない気持ちで、息をつく。あたしの口角がひくり、と持ち上がるのを感じた。

外は吹雪になって真っ白だった。最初は驚いて身体を固くしていたサヨが、今はあたしの動作に聴き入っていた。時々サヨは、ふうっと呼吸する。そうすれば人の温

もりを思い出す。あたしがなめているのはサヨの右耳なのだと。でも、それを思っで一層渇きが増す。あたしの渇きは、今までずっと口で息をして何も飲んでいなかったようだった。だから、生まれて初めての水だと思っていた。舌に乗っては、甘さが広がり、飲み込んで、のどを潤した。耳からあふれる水は永遠を流れて、あたしとサヨを繋いでいる。

## 水曜日王国

この国では常に春が謳われている。公園や河川敷で桜が咲き、山野で緑が萌える。地震、洪水、といった自然災害とは無縁の平穏な国だ。それは、全てHALによる恩恵だった。この国を支えるHALは、何もかもを制御できる超巨大エネルギー装置、らしい。その機械によって、国の天気も制御されて災害が起きない、と言われている。実のところ、その詳細を誰も知らないのだ。HALは、Have All Luckの略なのか、それともHeart And Lifeか、はたまたHealth Agent Lastingなのか……それさえ誰も知らない。知らないが、この国はHALによって春がもたらされ、幸せな生活を送れる。それに何の不满があるだろうか。いや、なんの不自由もないこの暮らしに文句を言う者はいないだろう。

「もうすぐ水曜日ですね」

ああ、そうだ。明日は水曜日で、天候も制御するHALによって、水曜日は雨が降ることになっている。声をかけてきた隣に座った女は黄色いウインドブレーカーを嬉しそうに羽織っていた。真夜中の広場では他にも色々なレインコートを着たり傘を持ったりして、外を見上げる人々がいる。

「ええ。あなたも水鏡を待っているのでしょうか」

あなたも同じ水鏡を信じる者なのでしよう、と挨拶を交わす。広場に集まって来た人は皆、「水曜日ですね」

「水鏡は」と似たような挨拶をしている。女は、ころころと鈴の鳴るような声を上げて笑って答えた。黄色いレインコートをばさりとはためかせて足を組みながら。

「そうなんです、新鮮な雨水を待っているのです」

しばらく、せわしなく何度も足を組み替えていた女は、空を見上げながらフラリと去って行った。日付が変わる瞬間に雨が降るからだ。ほら、もう鼻の奥を雨水のにおいが満たし始めている。芳醇な、柔らかく心地の良においだ。このにおいを知っている者がどれだけいるだろう。雨の日、水曜日は大抵の野外活動が休止し、大人ならなおさら外に出たがらず濡れないように過ごす。それに、自分の鼻は特別においに敏感なのだ。学生の際に友人につけられたあだ名がシックだった。

「お前、犬みたいに鼻がきくのな」

そう言った友人のあだ名はバーミーという流行の炭酸飲料の名前をつけられていた。入学して最初の昼休みに、友人は思いっきり振られていた炭酸飲料を何の疑いもなく開け、盛大に吹きこぼした。一日中その友人からは酸っぱくて甘いバーミーのにおいが消えなかったほどだ。その事件以来、友人のあだ名はバーミーになった。

「雨だ！」

誰かが一声叫べば、皆がざわつき出す。それぞれが持っている丸く平たい大皿に雨水を受ける。しとしと静かな雨を集めて、自分の器も満たされる。

「明鏡止水の恩恵に万歳、万歳」

感情のこもっていない厳かな台詞が周囲で上がった。

「明鏡止水」は、自分達にとって信仰であり精神統一の呪文である。我々は、そんな宗教染みた趣味を持つ者たちの集まりだ。水鏡の持つ神秘に惹かれている者達の「明鏡止水協会」。

「さて、水鏡はできたかな」

声にも水を含ませたようなぶくぶく水を詰めた風船腹を持つ、我々が明鏡止水の会長の言葉で雨水を受けるのをやめる。屋根の下へ、さらに地下下へ、ぞろぞろと皆が移動した。最低限の明かりを付けた、薄暗い無機質な部屋で水鏡を始めるために。

「なつかしいよな、小さい頃にさ」

若い男が水鏡を見て話す声が入った。水鏡は小さな時分に流行った占いの一つだった。占いなんてのは、女の子がよくやる遊びだ、と一昔前の者達なら言うだろう。大昔なら、水鏡は真夜中に剃刀を口に加えて覗けば未来の結婚相手が見える、とも言われていた。だが、我々は結婚相手を見たいわけではなく、ただ心の中にあるどこかをもう一度見ただけなのだ。夢と同じだ。夢

の中で、幼い頃にいた場所が出てきたり、自分の空想の世界が現れたことはないだろうか。今まで一度も思い出したことないそれらが、ふわりと見えてくる。ずっと心の中に仕舞っていたはずのものが見えた時、久しぶりに家に帰った時のように、失くしたものをようやく見つけた時のように、安堵するのだ。我々は、そうした安心の快感を得るために水鏡を求めている。ああ、ここにあった。その気持ちは何物にも代えがたい。

「お静かに」

また水風船会長の言葉で、皆が静かにそれぞれの水鏡を始めた。ここからはただ一人一人が、水鏡を覗き込むだけだ。自分の冷たい大皿も、静謐な水面を湛えて待っていた。一点の曇りも、一縷の波紋もない、美しい鏡と化した水面であった。そこに、暗い影に覆われた顔が映る。じっと見つめれば、影が真っ直ぐに通り返ぎっていく。

「シーク？」

甘ったるい酒のおいに、顔をしかめた。名前を呼ばれた方を見ると、やせぎすのスーツ姿のメガネの男が、バーのカウンターに座っている。私も、同じく隣のカウンター席に座っていた。私の服もスーツだな。前にあるのは、芋焼酎か。なら……この甘ったるいのは隣の男の

グラスだ。おそらくストロベリーキユールであろうカクテルを飲んでいるのは、よく見れば知っている男だった。

「なんだ、スリットか」

なつかしいあだ名を口にする。スリットは、学生の時からの友人の一人だ。こんなあだ名がついた由来は、女性のスリットの入った服にやたらとうるさい、という下世話な性癖の話からであった。一見、真面目そうなこいつが一番変態趣味だと他の友人の間でも有名だった。

「なんだとは失礼だな。聞いたか？ バーミーのやつがやっちまったのさ」

バーミー、私達の共通の友人だ。この三人で学生の頃からよく遊んでいたものだ。一番身体の大きいバーミーと、ひよろ長いスリット、一番背の低い私で、大中小とちょうど良いとからかわれたこともあったな。

「やっちゃって、何を」

焼酎に口をつけながら、聞く。そういえば、バーミーはどこに行っただ。私達は社会人になっても交流があり、こうして水曜にはこのバー「あまやどり」に集まって飲むのが習慣なのに。

「HALを止めようとしたんだよ」

それを聞いて、一気に予想がついた。

「ああ」

おざなりに答えた私を気にもせず、スリットはまくし立てる。

「例の自然回帰推進運動であいつはHALを使うのはもう止めるべきだって言ってるんだろ。まあ、それはそういう意見もあるよなって思うだけさ。だが、あいつはとうとうほんとにHALを止めようとした。どうやったのかは知らないが、ぶち壊そうとしたわけで。そうすりゃ警備に捕まるわけで。それで、今日のこの水曜の集まりに来れないってわけだ！」

文句を言い切ったスリットは、ぐいと一息にカクテルを飲んで私に目を向けた。馬鹿だろ？ と同意を求める目だ。

「それは……残念だな」

私は、ただそう言った。仕方ないな、といった気持ちしか湧かなかったからだ。

「……全く」

ぼそり、とスリットはそう言うと、店内は静かになった。しばらく、私もスリットも酒を飲んで黙ってしまった。そうした沈黙を破ったのは、スリットのこの言葉だった。

「……なあ、覚えてるか。僕らの水曜日王国を」

その名前を聞いて私は頭が揺さぶられ、間の抜けた声が出た。

「え」

ちょうど目の前に焼酎で満たされた盃があった。ぐつとくるアルコールのおいさえなければ、綺麗な水に見える酒が、ぼやぼやとにじみ始めた。酔ってしまったのだろうか。私の目の前に見るべきものが浮かんで、つかみそこねそうになった。覚えているとも！ と心の中で叫んで。

「何か見えるか？」

三人の男子が顔をつき合わせて下に置いた大きな鏡を覗き込んでいた。もちろん、その中に俺もいる。俺も、他の二人も黒い詰襟の学生服を着ていた。

「見えるな……鼻にティッシュを詰めたオレの顔が」

と、言ったのはバーミード。真面目くさって顎に手を当てている。

「だよな」

と俺も真面目そうに返してやった。バーミードは先程、氷の世界で突っ走って転倒したのである。俺が「すべるから気をつけろ」と言った途端に。それを見てスリットが「小学生かよ……」と呟いたのは同意せざるを得ない。顔を強打して鼻血を出したやつなんて、久しぶりに見た。

「てか、お前まだ鼻血出てるの」



スリットがそう聞くと、バーミーは鼻に詰めていたテ  
イッシュを引っこ抜いた。

「あ、もう止まってる」

鼻の穴を大きくしたり小さくしたりして、鼻血が出て  
こないことを確認するバーミー。それを放って置いて、  
スリットがまた鏡を覗き込んだ。

「はあー見えるのはそれだけかー面白くないな」

もう一度じっと見てもただの鏡だったらしく、すぐに  
スリットがつまらなそうに顔を上げた。

「やっぱり、ただの噂だったんじゃねーの」

鼻血の確認を終えたバーミーも、がっかりした声で言  
う。

これは、俺達が求めている鏡ではなかったのだ。俺達  
はこの空間創造シミュレーションゲーム「ミズカガミ」  
で隠しアイテムを探していた。「ミズカガミ」は好きな  
ように空間を作り、その中で遊べるゲームだ。本当にそ  
の世界にいるように全身で感じられる体感ゲームで、こ  
のごろの遊びといえば皆がこの異世界に浸っていた。俺  
達も、部活が休みの水曜の放課後に集まって「ミズカガ  
ミ」をする。ここにはない冬に憧れて、氷の国を創っ  
た。ごつごつとした氷が岩山みたいに現れる、白夜の続  
く世界だ。そして、ここを「水曜日王国」と名付けた。  
「まだ探す……？ もういいんじゃないか？ それより

氷の城みたいなの作らねー？ 見つけたってさ、未来が  
見えたって、それでどうすんだって話だし」

スリットが、俺達が探している鏡の探索の断念を提案  
した。俺達が探しているのは、このミズカガミの中にあ  
ると噂されている不思議な隠しアイテム、未来が見える  
と言われている鏡で、最近はずっとこの探索にかかりつ  
きりなのだ。しかも、やっとそれらしい大きな鏡を見つ  
けてもこのようにハズレときた。

「えーやめんのかよ。見えたらずげえーってなるじゃ  
ん！」

バーミーは反対した。さっきまでやっぱただの噂、と  
か言ってたのはどこのどいつだ。嘘だと分かっているも  
期待をしてしまうのがこいつのポジティブなところであ  
り、愚かなところだ。じゃなきゃ、明らかに怪しい缶を  
ぶちまけてあだ名がバーミーになったりしない。でも、  
考えなしのバーミーを俺は笑えない。……俺も、鏡を見  
つけたらどうするかなんて、考えてなかった。

「俺は……見つかったら面白いかなーって。氷の城もつ  
いでに作れば良いんじゃないか。作るんなら、空中庭園  
付きで」

別に一つのことしかしちやいけないうんて決まりはな  
い。どうせ探索も煮詰まるなら一緒にやればいいのだ。

「そうだな、一緒に作るか！ じゃ、オレの部屋は最上

階な」

俺の意見に同意して、早速手を挙げて主張するパーミー。それを見てやれやれと言った様子でスリットも乗ってきた。

「さすがパーミー……なんとかは高いところが好きって言うもんな……僕は地下に迷宮作って隠し部屋」

二人はそれから「迷宮なら化け物を入れないと」、「生物作るの難しいぞ」などと城の構想を話し続けた。俺は、二人が忘れているハズレの大鏡を何かに使えないかと、ひょいと手に取った。鏡の中にいる俺とぼちりと目が合う。んん？

「なあ、なんか変なおいがしないか？」

ひくり、と鼻の奥が反応していた。話し合っていた二人が鏡の中で首を傾げて、こちらを向いたのが分かった。

「さあ？ オレ、鼻血止まったばかりかであんま鼻きかねえや」

「んー？ そもそもミズカガミ、においまで再現してなくね？」

もっとよく嗅ごうと目を閉じてにおいに集中する。鏡から目を離れたその一瞬で何かが変わった。あれ？ 目を開ければ、鏡の中で俺の向こうに見えるはずのスリットもパーミーもない。俺自身さえも、本当に俺な

のか黒い影が顔を覆っていく。なんだ、これ。バグってんのか？ でも……このにおいを知っている。今日は水曜だから……雨が降るんだ。

「あら、ごめんなさい」

大皿の水鏡に、ぽつんと一片の桜の花びらが浮かんでいた。花片を中心として、くるりくるりと、まるい波紋が広がっていく。そのせいで、自分の顔はぐらぐら揺れて崩れてしまった。

「どこかに花びらが付いてみたいで……」

近くに立っていた大柄な女が申し訳なさそうな顔をしてこちらを見ていた。

「ああ、別に、構いませんよ」

懐かしい友人との日々を見てただけで、そんなに大したことじゃない。この明鏡止水協会に入ってからよく見るものだから。でも、自分の中にある最も見るべきものではない。もっと、どこかに、大事なものがあるはずだ。それを思い出すまでは水鏡は止められそうにない。

「今日、お仕事はお休みなんですか」

何気ない質問を女が振ってきた。平日の水曜になったばかりの真夜中過ぎに、こんなところにいるなんて、と普通に考えればそうなるだろう。

「いえ、やめたんですよ仕事」

自分は残念なことに「普通」ではなく、今日も何も無いのだ。それを聞いて女が慌てたように頭を下げる。

「あ、すみません、失礼なこと聞いて……」

自分のことでもないのに女が暗い口調で言うものだから、おかしくて笑った。思ったより乾いた笑い声が出た。久しぶりに声を出して笑ったからだろうか。

「いえいえ。自分で決めたことです。ちょっと、立ち止まってしまったんです。急に気づいてしまったというか。生きていて、死んでないなら、まだもつと何かできるような気がして……とりあえず今やってることは違うなって、止めて。何がしたいんだろうなって考えはしたんですけど、どれもがとても遠いと思ってしまうました。それで、とりあえず色んなものを見て、やることを探しました。でも、見つからないんですよえ……なんにも」

珍しく、自分の口から長い台詞が流れ出る。何度も自分の心の中で話した言葉だから、ずいぶん使い古している。

「……そういうこと、ありますよね。自分のことを見直したくなる時って。だから、わたしも水鏡を覗くんですよ。忘れていた大事なものが、ここにある気がして」

真剣に話す女の言葉は、勝手に同情してきて空寒い。

「……ええ」

女が黙って静かになったところでもまた水鏡に向き合う。そして、桜の花びらを水の上から救い出した。すると冷たい指先に、ぴとりと花びらが付いてしまう。くっついた桜を引き離そうと暗がりでも顔を近づけて、もう片方の手でつまもうとする。ふと自分の鼻先にかすかに甘いにおいがした。思わず喉を鳴らす、このにおいは、まろやかなアルコールの、酒だ。

「ちょっと酔ったかもな。頭いてえ」

ああ、そうだな。私も酔っていた。酒の入った杯の向こうに、懐かしい思い出と奇妙な場面を見ていた。

「飲み過ぎなんじゃないか、酒に弱いくせにそんなに飲むから」

酒に弱いからそんな甘くてジュースみたいなアルコールの少ないカクテルを飲んでいたくせに、量が多くなれば意味がない。

「ちょっとな。あーとにかく聞いてくれよ。ついこの間たまたま、馬鹿なことを起こす前のバーミニーに会った時にさ。あいつが水曜日王国の話をしたんだ。だから、シークにも聞いてみたかったんだよ」

私はテーブルに片肘をつくと、その掌の上に頭を置いた。首が左に傾いて少し、くらりとする。

「覚えてるよ、あの頃のこととはよく」

覚えている、ともう一度言おうとしたが、スリットの言葉に遮られる。

「バーミーはあるま覚えてねえと言った。でも、春じゃない世界を初めて体験したのはあそこだった。それから桜が咲かない場所をたくさん探したんだってさ。多くの冬を夏を、見つけた。あいつはそればかり頭ん中に詰め込んでる」

だから、自然回帰推進運動なんて始めたのか。だが、そんなにも春を避けるのは私にとってあまり気持ちの良いことではない。思わず自嘲気味に言ってしまう。

「へえ、そんなに春が嫌いなのかい」

今では良くも悪くも腐れ縁に思えるハル……昔はただただ憎らしかった。だからバーミーが、私にあだ名を付けてくれた事は本当に嬉しかった。私の名前がハルで、この国で一番有名なHALと同じ読みだったから。いっもどこかしこで聞こえる「ハル」にはうんざりしたものだ。そんな私の複雑な感情を察したのか、スリットがこちらを伺いながら言った。

「嫌い、じゃないだろ。育った場所だぞ。僕らがずっと……それを今更変えようなんて間違ってる」

はつきりと異を唱えるスリットは、まっすぐ前を見ていた。

「……」

私は、杯の縁を撫でて押し黙る。だが、スリットはそれを気にせずグラスに残ったカクテルを飲み干してから、口を開く。

「そういえば、あいつがちやんと覚えてるのはあの大鏡を見つけた時だって言ってたな」

ぼそり、と宙を見てスリットは呟くように言った。それから、ゆっくりと私の方へ視線を動かした。空のグラスを握ったまま、首だけを私に向けて。

「……なあ、あのハズレだった大鏡、ほんとはお前には何か見えてたんじゃないか」

何が、見えるって？ 杯の縁をなぞっていた指が震えて、カタカタ、杯が音を立てる。酒の水面がぶわりと波紋を広げた。なんだ、なんだ……酔ってる、じゃない、のか。何を、見ているんだ。

「おい！ やべーぞ！」

ハツとして鏡から手を放した。ボタンツと大きな音が出て鏡は地べたに落ちる。俺は、何を見ていた？ 知らない場所ばかりだった……知らない人、よく知っている友人。

「おいって！」

肩を揺するバーミーに気づき、さつきから騒いでいた

のはこいつか、とようやく隣を見る。スリットもそばにいた。

「うわ、強制退場だな。そんなに長いことやってたか？」

スリットが言う強制退場というのは、このミズカガミに組み込まれた管理システムの作動のことだ。長時間このゲームに没頭して帰ってこないやつを強制的にミズカガミから退場させるための。経験するのは初めてだ。桜の吹雪が合図となるらしい、とは聞いている。なぜ桜吹雪なのかは、このミズカガミもHALの力で動いてるから、だとか。

「すげー色……」

氷に覆われたここは白夜のはずなのに、じわじわと下の方から異質な桃色がせり上がって来ていた。絵の具の白が何色にも染まるように、桃色は簡単に白い世界に打ち勝つ。さらに好き勝手に固まった氷が、そこかしこでその桃色を反射している。次第に目に痛い、現実的でない色に包囲され、ここがほんとじゃないぞと警告されていく。

「あーあ、これやられるとしばらく遊べないんだよなあ」

スリットが腕を組んで立ち、ぼやいていた。強制退場させられると半月ほど使用停止状態に追い込まれる。バ

ーミーはそれを知らなかったらしく驚いた顔をしていた。

「マジで？ 来週の水曜どうするよ」

その場に足を投げ出してスリットは首を回した。

「他のゲームやる？」

バーミーもそれに習って、俺の隣に座り込む。俺もそれを見て座った。地べたもすでに桃色が映っていた。

「どっか行こうぜ」

明るい声でバーミーはそう言うてから、俺の方を見た。

「シークは」

スリットも俺を見て言う。

「なんかやりたいこと」

二人の視線を浴びながら、ぼんやりと俺は答えた。

「……別に、俺はなんでもいいよ」

ちらり、と桜の花びらが視界に入る。と、見る間に桜は増えてバーミーは口を開けて見上げた。スリットも目を見張って落ちる花びらを見上げている。

目の前はすべて、桜になった。何のおいもしない邪魔をするだけの、「正常」に戻すための桜。はらはら、はらはら、と降り続け、自分をどこかに戻そうとしている。桜は、私がどこにいたべきか知っているのだろうか。それとも、このまま俺は消えてしまおうべきなのかも

知れない。ここを出ても、どっちつかずで、なんでもない者はどこかでまた追い出される。やけに目の玉が熱くなって、頬を塩辛いにおいがするものが伝った。ぼやけた桜色で、もうなんにも見えないな。息が苦しいような気がして、身体の奥深くからありもしない痛みを感じた。痛い、いたい……。

「誰か、泣いてる？」

いたい。まだここに。目を閉じ大きく息を吸い込んで、次に目を開けた場所の最初のおいを嗅ぎ出そうとした。

## ウォーター・ゲーム

中学生っていうのは、小説やドラマの中では一番の青春のように多く語られる。友達と一生懸命なかに取り組んだり、未知の敵と戦ったり、突然かわいい女子と仲良くなったり。とにかくキラキラと輝いていて、大変ですごく大事な時のように描かれる。

だが俺は、そんな生活とは無縁だった。どこかにそういうキラキラした中学生はいるかも知れないが、現実はそのようなものじゃないと思う。俺みたいな奴もいるはずだ。ただ学校というものがあるから行って、授業というものがあるから受けて、話しかけられるから適当に应付、とがめられもせず褒められもせず、そこその成績を保つ。特にできるスポーツもなく、だからとアニメを見たりゲームを試してみたりする。

俺はそんな生活の中にいつもいた。変わらないことは良いことだ、と誰かが言っていたが、本当に良いのだろうか。退屈な平和、そんな言葉が頭に浮かぶ。浮かんですぐ、何を格好つけてるんだ、と一笑する。……空っぽだ。

「ちよっと！ 飲み終わったんなら自分でちゃんと洗ってよね」

俺が持っていた空のペットボトルを指して母が言う。

母はリサイクルとか分別にうるさい。ペットボトルも洗って乾かして、と小うるさく言ってくるのだ。あとでやればいい、と空のそれを脇に追いやる。冷たい飲み物が欲しい。寝転がっていたリビンクの床から立ち上がり、キッチン冷蔵庫を開けた。

なんだ、お茶しかない。仕方なくお茶の入ったペットボトルに口をつけて飲む。一口分減ったお茶の中に戻して、ボタンと冷蔵庫を閉じた。それからリビンクのテレビで録画したアニメを見ようとしたら、すでに母がテレビの前を陣取っていた。

「なんか面白いもんでもやってんの？ 俺、録画したやつ見たいんだけど」

「昨日のドラマ観るのよ」

ああ、ため息をついてリビンクを出る。俺が見たいものを主張しても、「宿題やったの？」が返ってくるだけだ。そんな自滅するようなことはしたくない。二階の自分の部屋に戻って、とりあえずスマホの電源ボタンを押して画面をつけた。何か暇つぶしできそうなゲームでも探そう。

ベッドに横になってスマホを触る。検索した色んな無料ゲームが表示された画面を、時おり指で撫でながらつらつらと眺めた。ドラゴンなんか、魔法のやつ、パズル系、育成ゲーム、ガンアクション、最近のアニメとコ

ラボしてるやつ……ええっと、もっと単純ですぐ終わりするな、面白いやつがいい。

「あつ」

画面を触っていた指が誤って、不意に表れたメールの通知表示を押してしまった。イラつきながら、無駄に表示されたメルマガをさっさと消す。さっきの検索画面に戻れば、おすすめのゲームという表示に青色を背景に白い花が咲く絵が新しく出ていた。どっかの有名な会社が作ったものじゃなくて、趣味で作ったような感がある。ちよつと頑張れば誰でも描き写せそうなありきたりな絵だ。どんなもんか見てやろう。

ゲームのタイトルは……『ウォーター・ゲーム』

ようこそ

水の中に沈み続ける世界へ

あなたはこの世界で生き残らなくてはなりません

この水の発生源となっているウォーター・フラワーを刈り尽くすのです

ピチョッ、と水の落ちる音が部屋はどこかでする。

音のしたところを探して、ゆっくりと辺りを見渡した。

すると机の下で真っ直ぐ上を向いた白い花が一輪、咲いていた。見ているうちに花の根元からこんこんと水が湧

き始める。すぐに足首ほどまで水が上がってくる。水滴が落ちるようなゆっくりとした水音が、この時にはポツポツと小雨のような音に変わっていた。

水はどんどん上がってくる。音もどんどん激しくなる。だが、白い花を勢いよく刈り取れば、水も音も花も消え、世界は正常に戻った。

「お風呂空いたわよ」

はっとして、時計を見ればもう夜の十一時だった。ゲームを始めてから二時間も経っていた。階下から母の大きな声がまた聞こえる。

「お、ふ、ろ、空いたって言うてるんだけど！ 早く行きなさいよ！」

「聞こえてるよ、うるせえな」

小声で言い返して、仕方なくゲームを消し一旦終了させた。ずっと画面を見ていたせいか、遠くを見ると目の焦点が合わせづらい。だからとした動作で、風呂へ行く準備をした。

さっさと風呂に入らないと、この前みたいに勝手に湯を落とされるはめになる。着替えを脇に抱えて部屋を出れば、ちょうど帰って来た父に会った。

「風呂、まだ入ってなかったのか」

「……今から行くから」

これ以上話すのが面倒なので顔を合わせないようにして父の横を通り過ぎ、階段を下りた。

風呂でシャワーのハンドルをひねればお湯が出る。そんなことは当たり前のことだが、さっきまでやってたゲームのせいでザーツと流れる水音がゲームの警告音に思えた。そう、ゲーム……ただの単純な遊びの……。

シャワーで身体を洗った泡を流して、それから浴槽のお湯に浸かった。ゆったりと浸かりながら考えるのは、あの『ウォーター・ゲーム』のことだった。

ゲームが始まると、スマホのカメラを使って現実のその場が画面に映し出される。たとえば、この風呂場でやったらこの風呂場が、自分の部屋でやったらその部屋が、ゲーム画面になるのだ。そうした画面の中に映った現実の場所に現れる花を、画面にタッチしてスライド、刈り取るだけという簡単なゲーム。花が現れる前兆として水が落ちる音がし、気づかず見つけれられず放って置くと花から湧き出した水で画面の中がいっぱいになってしまう。そうすれば、ゲームオーバーだ。花が増えれば増えるほど水音が増し、水が増えればその音の激しさが増す。

さらに、刈り取った花はどれも白いがよく見れば一つ



一つ形が違った。ウォーター・フラワーと呼ぶその花は凶鑑に登録されて、この凶鑑の種類を増やすこともゲームの目的のようだ。なかなか楽しめそうな要素もあるが、ゲームオーバーになると凶鑑がゼロになるという鬼畜仕様もある。課金しないとこの仕様から逃れられないらしい。俺は課金する気にはなれないので、気長にやってみようか……。まあ、失敗してもゲームなんだから。

「うわっ！」

冷てえ……。急に水滴が落ちてきて肩に当たったものだから、驚いて声を出してしまった。湯気に暖められた空気が結露して天井から垂れてきたらしい。冷たいしずくが当たった肩をぐっとお湯に浸けてから、風呂を出た。

風呂から出ればリビングに明かりが灯っていて、父が夕食を食べているのが分かる。母の話す声も聞こえて、二人ともしばらくここから離れなさそうだ。俺は母の明るい笑い声が聞こえるリビングに背を向けて、二階の自室に戻った。

朝、起きたらザーザーと雨音がしていたので焦った。ゲームをつけっぱなしにして寝てしまったのかと思っただ。そんなことをすれば、すぐに画面の中が水でいっぱいになってゲームオーバーになってしまう。せっかく集

めた凶鑑もバアだ。だが、安心なことにそれは本当の雨の音だった。……。なんだ、朝にしては暗いと思っただ。

「起きてるー？ 朝よー」

母の大声が外から聞こえて、ベッドを降りる。まだ寝ていると思われて部屋に入られたら厄介だ。部屋を出て、下におりれば父が慌しく玄関から出て行く姿が見えた。

「いつてらっしやーい」

おそらくキッチンにいるのだろう、母の声がそれを見送る。無言で俺がリビングに入れば、やはりキッチンで洗い物をしていた母が喋り出す。

「おはよう。もう、お父さんったら朝から靴下がないって騒いで。昨日タンスの上の引き出しに入れておいたって言ってたのに。ほんと忘れっぽいんだから。あ、今日は傘いるわよ。梅雨前線が張り出して、しばらく雨がやまないらしいから」

俺は朝食を食べながら適当に聞いていた。相槌を打たなくたって、母はお喋りをやめないのだから構わない。

「ここ一週間はズーっと雨。洗濯物が干せなくて困っちゃうわ。嫌ね。あら、もう食べたの。オレンジジュース、いらない？」

首を振って席を立つ。母は、俺が中学生になってからオレンジジュースを飲まなくなつたのに、今でも朝食後にジュースのバックを持って聞いてくる。いい加減覚えたらいいのに、俺はもうそんなの飲まないって。小さい子どもじゃないんだから。

上にあがって、部屋で制服に着替えカバンを持つ。すぐにまた階段を下りて玄関を出れば、どこで見ているのか母の「いつてらっしゃい」が後ろで聞こえた。

学校に行っても別段、楽しいことはない。とりあえず自分がやること、授業を受ける、宿題を提出する、などをやるだけだ。いつもと変わらない……いや、今日は少し違った。休み時間に宿題をしていた。

「珍しいな、お前が宿題やってこないなんて」と、クラスメイトに声をかけられた。昨晚、ゲームをしていて宿題をやるのを忘れたのだ。休み時間にやれば済む程度の宿題だったので困らなかつた。

まあ、そんなこともあつたが他は滞りなく終わった。ザーザー降る外の雨の音を聞きながら、何もかもがいつも通りに過ぎていった。放課後は部活もやっていないのですぐに帰れるが、長いこと家でだらだらしていたらまた母に何か言われるに違いない。だから俺はいつも本屋に寄ることになっている。隣にCDショップやゲーム屋が

併設された大きい店だ。

下駄箱で靴を履き替えながら、今日は何か欲しい物の発売日だったかどうか思い出そうとしていた。そして傘入れに突っ込んでおいた、青い傘を手取る。俺は黒のもっと地味な傘が欲しかったのに、母が買ってきて仕方なく使っているやつ。いつか盗まれたら買い換えのチャンスだと睨んでいる。だがこんな、いかにも安物な「男の子」といった感じの傘を誰も盗む気にならないかも知れない。

靴も履き替えカバンも忘れず、準備万端で外に出て傘を開こうとした時に、雨が降っていないことに気づいた。まだ空気は湿っぽい、鼻の中をこするような雨のにおいに満ちている。空も重く黒い雲に覆われている。が、降っていない。雨がやまない、なんて天気予報は嘘つきである。

「なー今日マンガの発売日だぜ」

びくり、と一瞬驚いて、急に騒がしくなった背後のその声に耳をすました。この声はこの学校の有名な不良たちだ。よく授業をさぼったり、校則違反の服装やゲームの持ち込み、時には大声で騒いで授業を妨害もして、先生や真面目な生徒は迷惑している。最近は大バコも吸っているらしい。そいつらが「マジで」などと笑いながら、出入口の端に立っていた俺に気づかず、玄関を出

て行く。あいつらはどう考えても俺と同じ本屋を目指すに違いない。あそこは、この田舎で一番品揃えの良い大きい書店なのだ。鉢合わせしてあんな奴らに絡まれたくない。ああ……。寄り道場所を失った俺は、のろのろと帰路につくしかなかった。

歩き出してすぐにあのゲームの続きをすることに思い至った。部屋とは違う景色の中なら、新しいウォーター・フラワーが見つかるかも知れない。

学校を出て木々が茂る急な坂道を下れば、だんだん坂もゆるやかになり住宅街に入る。俺はスマホをかざして耳を澄ませる。坂道の木々と家の境目で水が落ちる音がした。ゆっくり、その音の方へ向く。トツ、タツ、タツ、トツ……。これは金属の上を跳ねるような水の音だ。どこだ、この近くにあるはずだ。

「っと、あぶね」

坂の横に落ち窪んだどこかの家の裏庭があつて、スマホの画面ばかり注視して足元を見ていなかった俺は危うくそこへ落ちるところだった。少しどきりとした心臓を落ち着けて、よくよくその裏庭を見れば汚れた白壁の蔵の前に、百合のような細長い花卉を持った花が咲いていた。ゆるゆると花から水が湧き出していく。このままいけば庭は、蔵もろとも沈んで池になってしまうだろう。水に浸かった蔵と、その水中で溺れながらいつまでも水

をあふれさせ咲き続ける花を見てみたい気がしたが、タタタタタタ……。と間隔を縮めて降り出した水音が聞こえた。俺の指は機械的に花を刈り取っていた。

家に帰った時にちょうどまた雨が降り出したので、傘を使わずに済んだ俺はなんだかちょっと得した気分になった。今日の俺はついている、のかも知れない。リビングで昨日見損ねた録画を見ていたら、玄関をガチャガチャ開けて母が帰って来た。買い物袋を提げて、大声でリビングにやってくる。

「もう車降りた途端に降り出してくるんだから！ もう少し待ってくれないじゃない！ あつ洗濯物……。ね、ベランダのやつ入れてくれた？」

うるさい声にテレビの音量を上げるか迷う。「洗濯物」、そういえばベランダに干してあったかも知れない。

「いや……」

全然入れてない、と最後まで言う前に、買い物袋を置いた母が不満そうにベランダに向かう。

「濡れちゃうでしょ！ まったく、気が利かないんだから！」

乱暴に階段を上る音が遠ざかっていき、俺はそのままテレビを見続けることにした。

録画していたアニメを見終わると暇になって、結局ウォーター・ゲームに手を出していた。母は、洗濯物を取り込み終わってからキッチンに引っ込んで夕食の準備をしている。床に横向きに寝転がって画面を見ていたら、ゲームの更新のお知らせが来た。早速更新してみると新しい機能があった。ランキング機能だ。一日に刈り取ったウォーター・フラワーの多いプレイヤー順に、ランキングされるらしい。俺はそのランキングに登録するため「トイ」と名前を入力した。最近、ゲームやネットによく使うニックネーム。入力が終われば二十四時に集計された順位の結果を待つだけ。それまでもっとゲームを進めることにした。

ポツポツ、水滴の落ちる音がすれば花を探す。ポツポツポツポツ……見つけて刈り取る。ポタポタ、またどこかで水が落ちる。ポツポツポツポツ……また見つけ出して刈り取る。ポトポト、水の落ちる音。トットトットトット……見つけたら刈り取る。白い花たちが、一本、二本、三本……とどんどんどこかで生まれて溺れさせようとしてくる。刈らなくちゃいけない、早く刈らなくちゃいけない。

おめでとう  
称号を奉げます

あなたは五番目の優秀者となりました  
やがて沈みゆく世界を救う勇者たちにレインの加護があらんことを

レイン……？ ぼうつとする頭でその賞状をじっと見る。おなかはすいていない、身体はあたたかい。気づいたら、俺は夕食を食べ、風呂に行き、部屋にいた。ウォーター・ゲームを続けていた。食べたこと、風呂まで行ったこと、それらがやけに淡白で遠くの出来事に思える。した、という記憶はあるが、やった、という実感が無いのだ。でも、俺はゲームでランクインした。それさえあれば、問題ないこと……特には、きつと。それより『レイン』だ。このウォーター・ゲームの世界は詳細が語られていない、ゆえにレインという言葉も初耳で新しく明らかにされた設定なのだろうと予測する。加護と言ってるくらいなのだから、この世界の神のような存在に違いない。レイン……雨か、外はまだ雨が降っている。単調な雨の音は、俺を次第に眠りへと誘った。

気づいたら、暗い灰色の街に俺は裸足で立っている。靴をはかずに外にいるというのは心もとない。早く帰りたい。……ここは、どこだろう。後ろを振り向けば、他の家と同じように灰色になった自分の家があった。で

も、こんなに町は暗くないし、そもそもこんなに入り組んだ路地になっているはずがない。俺が住んでる町は、広がる田んぼの中にとどころどころ住宅地があるのだから。なのにここは、大きくなったり小さくなったり、家々が坂の上に乗っかっている。左右前後に曲がりくねった道がどこかに通じている。一体、ここは何なんだ？

「わっ」

足に冷たい何かが触れて、驚いて声を上げてしまった。足元を見ると、じわじわと水際がこちらに向かって来ていた。この路地は水に侵食されている……そうか、これは夢だ。冷たい水の感覚が頭を鋭く刺激して、ぼんやりとしていた意識を固めていった。こんなことが実際に起こるはずがない。ここは、夢の中なんだ。

そう思えば、何もかも急に嘘臭くなった。何をしても死なない、本当じゃないんだから。もう裸足のことも灰色の家も気にせず、水に浸されている路地を歩き出した。ぱしゃり、ぱしゃり、水で足首まで濡らして。

どんなに角を曲がっても同じような灰色の家しかない。どこにも行き着けないというのは退屈だ。さらに、足首を濡らしていた水がいつものまにか膝下まで来ていた。これ以上進んだって水が増えるだけだ。立ち止まって長い夢が醒めるのを待つことにした。ふと、白い何かが見界の端に映った。

「花だ」

目の前の水面に、白い花が浮かんでいる。その蓮の花のような両手で抱えるくらい大きな花は、ぼとぼと上から落ちてきた。見上げれば、灰色の雲からまだ白い花が落ちてくる。その一つが顔に当たりそうになって思わず目をつむった。

「え、ああっ！」

一瞬のうちに世界が回った。足先が何も捉えることなく、ぐん、と水の中に入り込む。その前にきつと頭がもう水に打ちつけていたはずなのに、苦しくはなく、ただ身体全体がまとわりつく何かに沈んでいく感覚の中にあつた。がばり、がばり、と……。ああ、水の中だ。重い水に腕も足も沈められていくばかりで動く気配がなかった。そもそも身体全部が自分のものでないような、ぼんやりしたものになっていた。俺が水中に落ちた時にぶつかったのか、白い花がその大きな花弁を散らして、俺の周りで一緒に沈んでいこうとしている。俺は、溺れているのか……？　なんて深い水だろう……。

「朝よー、学校遅刻するわよー」

はつと起き上がろうとして、ぐちゃぐちゃになった布団が足に絡まって、馬鹿みたいにシーツの上を転がった。蹴りつけるようにして、布団から抜け出す。立ち上

がった時、ザーザーと雨音が耳についた。スマホに手を伸ばして、画面を見る。……ゲームじゃない。良かった。そのままスマホをポケットにねじこんで、部屋を出てリビングに向かった。

俺が朝食の席に着くといつものように母が喋り出す。父はもうとつくに家を出たようだ。適当に母の話聞き流していたが、天気のことになった時、妙な気分になった。

「昨日の夜、すごく降ってたじゃない？ そのせいで川が増水してるらしいわよ。しばらくしたら水も引くらしいけど。またたくさん降ってきたら危ないわねえ。あんたも帰り道とか気をつけなさいよ」

それから母の話は、川に近づくな、だとか、洗濯物を室内干しするのは嫌だとか、どうでもいい話に移っていた。俺はそれをまたぼんやり聞き流して、昨日の夜、という言葉から、昨日の夢を思い出していたのだった。あの、大きな白い花は、刈り取るべきだったんじゃないだろうか。

「オレンジジュース、いらない？」

相変わらずジュースのパックを持った母がそうたずねるが、食べ終わった俺は首を振って立ち上がった。リビングを出て、階段を上ろうとする。が、ザー、と水の流れる音がして、ポケットに入れていたスマホを見た。

画面の中にはゲームはついていない。ああ、あれはキッチンで母が食器を洗う音だ。

学校に着いた時にチャイムが鳴って、あれ？ 今日母の「いつてらっしゃい」を聞いたっけ？ と疑問に思った。それよりも、外がずっと雨だからウォーター・ゲームの雨が音が聞き分けられなくなるし、ゲームができないからイライラしていたことしか思い出せない。建物の中に入れば外の雨は遠のくから、やっとゲームができると安心したんだ。下駄箱の中から履き取り出して履き替える。さっきのチャイムは予鈴だからまだ大丈夫、余裕で間に合うだろう。あくびをしながら教室に向かっていると声をかけられた。

「なあ、お前……ずっとカサ差して来たの？」

はあ？ 何言ってるんだこいつ。雨が降ってたから傘を差すのは当たり前だろう。それとも、「そんなカサ差して来たの」と俺の傘を馬鹿にしてるのだろうか。俺が「ん、まあ」と適当に答えると、そいつは「ふーん」と言ったつきり仲の良いやつに話しかけに行ってしまった。クラスメイトだとは思いますが、名前も覚えてないやつだし放っておけば良い。俺はさっさと教室に入った。

退屈な授業の合間にゲームを進めた。授業中にゲームをするなんて、見つかった時にスマホを取り上げられる

ようなりスクの高いことはほしくない。昼休みになれば、購買のパンを腹に詰め込んでまたすぐゲームに没頭した。中断したのはトイレに行つた時ぐらいだ。

「うわ、めちゃくちゃ降ってきた。こりゃ部活、外できねーなあ」

「どーせ、グラウンド使いもんになんねえだろ」

そんな会話を耳にしたのは覚えていいる。あと、トイレの水を流す、ジャーツという音。それだけで、またウォーター・ゲームに戻つた。教室が騒がしいので、ほとんど人が寄りつかない図書室の事典コーナーに移動して。ここは図書室の一番奥の隅っこで、植物事典だとか家庭の医学だとか誰が使うのか分からない重くて大きな古臭い本ばかりある。俺はこの本を使うやつを一人も見ることがないし、きつと使うやつは授業で言われて、とかそんなもんなんだろう。

静かな図書館には、水の音がよく響く気がする。ほら、またどこからかポタポタと水の滴り落ちる音がある……。本の背表紙が並んだ中に、白く咲いた小さな花があった。先のとがった花びらが五枚あって、ちょうど白い星みたいだ。ピチャピチャ、ピチャピチャ、増える水は、本を水浸しにするように浸食してきて、悪いことを楽しんでる気分になった。原因はこの花だけど、俺がゲームを始めただけに大事な図書室の本が全部ダメ

になった、みたいなの。もつとやつてしまえばいいのに……でも、ダメだ。ゲームオーバーは、この世界が終わるのはダメだ。終わるといふことは死ぬようなもので、死んだらこの花も見れないんだから。俺が、この花を刈り取らなくてはいけない。力を込めて、小さな白い花を刈つた。

図書室の事典コーナーは居心地が良かったので、午後の授業が終わつた放課後もギリギリまで居座つた。部活も終わる下校時刻になれば、追い出されて学校を出た。

「レイン……が……迎えに」

相変わらずの雨の中の帰り道にふと耳に入った言葉が、そんなふうに関こえたものだから思わず立ち止まって盗み聞きした。同じようにウォーター・フラワーを刈り続ける仲間かと思つた。それに、もしかしたら俺よりもゲームが進んでいてあの世界について詳しく何か知っているのかも思つた。だが、話していたのは甲高い笑い声が耳障りなスカートの短い女子高生。話の内容はよく聞くと「レインコートが破けて車で迎えに来てもらった」というどうでもいいつまらない話で、蹴り倒したくなった。俺はこんなにも真剣に聴いたつてのに。そういった足を足早に追い越して、すぐに家に帰つた。

家に帰っても雨はやまず、かえって増したぐらいだ。こんなに降つたら、警報でも出てるんじゃないだろう

か。まあ俺は、ずっと部屋でウォーター・ゲームを続けていたから知らない。ずっと、と言ってもちゃんと晩飯も食べ、風呂にも行っただろうが、やっぱりあんまり覚えていない。日付が変わる前にもう少し花を刈っておかないと……せつかくだから今日もランクインしたい……もう少し、あと少し。

ええっと、あー花が咲いてるなあ、と思って刈り取った。目が覚めた時、ぼんやりとした視界に部屋の壁際にある白い花を見つけたのだ。朝なのにこうも部屋が薄暗いのは、今日も外で雨が降っているからだろう。それにしても、さつきから立て続けに水の落ちる音がする。ダツダツと打ち付ける音が。それを聴いていると、俺の心臓も打ち鳴らされていくようで、焦って足が滑った。ダンツと一段、階段を踏み外したのだった。ああクソッ！ なんだよ、まだどこかにあるのか。手に持ったスマホの画面から階下をのぞく。リビングに向かう途中の廊下で、花を見つけて刈った。母が何やら喋りかけてきたが適当にあしらう。どうせこの雨の愚痴だ。今も降りやまないこの雨の。いつも通りに朝食を食べていたら、またどこかでポツと水が落ちる音がした。急いで食べ終わると、母の差し出すオレンジジュースを押しつけてリビングを出る。ザーッともうこんな音が激しく

なっている。上だ。上の方から、聞こえてくる。

スマホを握ったまま、一段、一段と二階へ近づく。上りきった時にちょうど窓があつて、雨の中、灰色に煙る町が見えた。ザーザーザー……うるさい雨だ。つと、画面に白い花が咲いている。俺の部屋の前に、まあある花びらの知らない花があるのだ。すぐに機械的に刈り取ってやる。けれども、ザーという雨の音がやまなかった。これは外の雨と混じっているのかも知れない。ややこしい。ほんとの水の音はどこだろう。花を探さなくちゃなあ……。だが、俺が水の落ちる音を聴き逃すまいとすればするほど、外の大きな雨音が邪魔をする。イライラして俺は、部屋の前を歩きまわった。

ああ！ うっせえ雨だな！

「雨なんて降ってないわよ」

階下から、そう母の声が出た。俺の目が乾いていく。どうやらまだ夢の中にいるらしい……。ずるりと、部屋のドアに背を引きずりながら座り込めば、窓から差す白い光が見えた。



## 虹色みずうみ

わたしのおばあちゃんが死んだのは五年前の夏だった。

それまでお母さんに連れられて、毎週おばあちゃんの病室にお見舞いに行っていた。その日だっていつものようにお見舞いに来ていたのに、突然おばあちゃんの病室が騒がしくなったのだ。

お医者さんや看護師さんが行ったり来たりして、それがぱたりと止んだら今度は親せきのおじさん、おばさん達がどんだん病室に入っていて満杯になった。小さなわたしはたくさんの人に驚いて母の後ろに隠れながら、病室の中に入った。人はたくさんいるのに、だあれもしゃべらない。みんな、じつと真ん中のおばあちゃんの寝ているベッドを見つめている。わたしはだんだん怖くなってきた。なんにも動かないものだから、時間が止まったみたいで、わたしがぎゅっと握っているお母さんの服のすそは、知らないおっきいお人形の服みたいに思えた。まだ背の小さいわたしには高い人の壁でベッドの中がよく見えない。その人はみんな怖くなってる。だから怖いものを見えないように、そっと天井を見上げた。すると、天井から青くて透き通ったモノがおおいつくすように落ちてくるのだ。

(あ……)

心の中でそう声を上げた。口を開けて、落ちてくる青から目を離せずにいた。誰もこれに気づいていない。しとしと、しとしと。青はそのまま大人の頭の高さまで落ちる。

「うっ」

その時になって、誰かのうめく泣き声やと静けさを破った。それから色んな人が同じように泣き出した。お母さんも、泣いていた。わたしは泣かなかった。病室が、とろりと青に入り込んでしまったのを気にしていたからだ。その青さに目を見張って、息をすることさえためらった。

でも、病室を出たあとに振り返って見たおばあちゃんの病室は、ただの真っ白い部屋に戻っていた。そのあとしばらくして、おばあちゃんにはもう会えないということを知った。

今日のみずうみはピカピカ白い光がいっぱい、きれいだ。そして、空は雲一つない青空。この公園は、みずうみに沿って走る道路のそばにある。みずうみは道路の下の方にあるから、公園からとてもよく見えるのだ。でも、おもしろそうな遊具もへんな銅像もないからめったに人が来ない。そんな公園だから、高校生のお兄ちゃん

のナカくんと、まだ小学生のわたししかない。ベンチに座ったナカくんのひざの上にごろんと頭をのせたまま、そんな光景をほんやりと見て、自分の長い黒髪をくしゃくしゃ触る。そうしていたら、口からあの青の話を出してしまった。

「ナカくん、おばあちゃんがいなくなった時にね、わたし、青を見たんだよ」

わたしのヒミツだったのに。ヒミツがある方が女の子はかわいいのだ。テレビの中のすぐくかわいい女の子が「ヒミツはかわいいさの秘訣なの」って言ってたから。あーあ、なのにヒミツじゃなくなっちゃった。

「病院のお部屋でね、上からとろとろした透明の青が落ちてきたの」

ヒミツをしゃべってしまったことに少し落ち込みながらわたしが話していると、ナカくんは大きな手でわたしの髪をゆつくりすいて、きれいに直してくれた。

「だあれも見えてなかったけど、わたしには見えてたのよ」

きれいにしたわたしの頭をナカくんがやさしくなでる。わたしがヒミツをしゃべったのにナカくんはなんにも言わないものだから、なでていたナカくんの手をどけて、頭をあおむけにして見あげて言った。

「ほんとよ」

いつもと変わらず白い顔をしたナカくんは微笑んで、

「うん」

とだけ言う。わたしは信じてくれたんだ、と思つてほつとしてナカくんのひざに手をつけて起き上がった。足りない背にもたついてベンチの上にひざ立ちになって、なんとかナカくんの耳に口もとを持つていった。

「これ、ヒミツだからね。だれにも言っちゃダメ」

こそこそ、両手を口の横に立ててヒミツを言うマネをする。それにくすぐったそうにちよつと笑つて、ナカくんはこう言った。

「わかった、誰にも言わないよ。じゃあ、僕もとつておきのヒミツを話そうかな」

いたずらのキラリがナカくんの瞳に光ったのが見えた。これは、おもしろい話をしてくれる時の顔だ。わたしはナカくんの隣にきちんとすわり直した。

「なあに？　いつものおはなしでしょ？」

足をブラブラさせて聞くと、ナカくんは首をふつて言う。

「いいや、これは虹のヒミツの話だよ」

あるところにシイちゃんという知りたがり屋の女の子

がいきました。ある日シイちゃんは空にかかる虹のヒミツが知りたくなって、虹を追いかけました。

雨が降って、やんで、それからお空に虹が出ます。それを見つけたらシイちゃんは虹に向かって歩きました。しばらく行くと、マルタくんという男の子に会いました。

「こんにちは、マルタくん。わたし、いま虹のヒミツを探してるの」

マルタくんはちよつぱり意地悪な子で、それを聞いて「虹のヒミツなら知ってるぞ。虹は、お空にない時は、みずうみの中にあるんだ」

とウソを教えました。

「みずうみの中に虹があるなんて知らなかった。教えてくれてありがとう」

シイちゃんはマルタくんのウソを信じて、虹の先にあるみずうみを目指しました。どんどん歩いていくと、虹はやがて消えてしまいました。でも、シイちゃんはその時ちょうど大きなみずうみの前まで来ていたのです。

「マルタくんの言うとおり、虹はみずうみの中に消えたんだ」

すっかりマルタくんの言うことを信じたシイちゃんは、みずうみに突き出た港から虹を探すことになりました。そうしてシイちゃんがみずうみをのぞくと、なんと

本当に水の中に虹色が輝いているのです。

「きれい」

シイちゃんはみずうみの中の虹に手を伸ばしてつかもうとしました。すると、どこからともなく

『さんびえか さんびえか』

と、不思議な音がします。みずうみの波がゆらゆら大きくなって、ぴしゃりと冷たい水しぶきがシイちゃんの目にかかって、思わずぎゅっと目をつぶりました。それからシイちゃんの身体があったかい何かに包まれて……そっと目をあけると、そこは虹色のみずうみの中だったのです。

・ ・ ・

「その虹色のみずうみの中はね、不思議と息も苦しくなかったんだ」

そこまで話すと、ナカくんはほうつと息をついて、どこか遠くを見たままだまってしまった。わたしは話のつづきが気になって、ナカくんの服をひっぱる。

「それで？ シイちゃんはどうなったの？」

ナカくんは遠くを見たまま、

「つづきは明日にしよう」

と言った。むっとして「今日がいい」と言おうとした

ら、ナカくんはわたしの頭をなでてから立ち上がった。また、またね、レーコちゃん」

こういう時、ナカくんはさっさと帰ってしまうから、今日はもうおしまいだ。ほら、ナカくんはニコッと笑ってすぐに背をむけて行ってしまった。わたしはベンチのはしっこにおいていた麦わらぼうしをかぶると、ナカくん「ばいばい」と手をふった。ミン、ミン、とセミの鳴き声がうるさくなった。

みずうみの見える公園まで走って行く。そしたら、汗がたらたら出てあついけど、公園に着いて木陰のベンチにすわれば、体から「あつい」が逃げていくんだ。

「そんなに走って暑くないのかい」

もうベンチにいたナカくんが、銀色の水筒を差し出してくれる。わたしはそれを受け取って、隣にすわる。

「あついけどね、走って止まったあとに、ぶわあって風みたいなのがきてちよつとだけ涼しくなるんだよ」

水筒の中にはつめたい麦茶が入っていて、ごくごく飲んでるとナカくんが笑ってこっちを見てることに気づいた。

「なあに？」

わたしが聞くと、ナカくんは「なんでもないよ」とい

うふうに首をふる。そうして

「おいしい？」

と聞いてくるものだから、うなずいて答える。

「うん」

ナカくんはそれにも笑顔でにこにこしている。わたしは、きゅつと水筒のフタをしめてナカくんに返ししながら言った。

「早くおはなしのつづき、して。わたしだって、いつもヒマじゃないんだからね」

ヒマじゃない、って強く言ってみる。だって大人はみんな「子どもはヒマでいいよね」って言うから。でもわたしも「大人はいいよね」って思ってる。大人はたくさんのの、わたしが知らないことをもってるんだ。空からどうして雨が降ってくるのとか、むずしそうな算数の答えとか、カエルがどうしてオタマジャクシから変身するのとか、あとは……死んじゃうって何、とか？ 大人はきつと知っているのにヒミツにして教えてくれないんだから。

「へえ、夏休みなんじゃないのかい」

ナカくんも、わたしにはとつても大人に見える。わたしは高校生と大人のちがいもよく分かんない。大きい人は、みんな大人なんだと思う。

「そうだよ。ちゃんと毎日ちよつとずつ夏休みの宿題や

ってー……」

ちよっぴりムツとして、ナカくんに説明してあげた。「えらいなあ、レーコちゃんは。ちゃんと宿題やってるんだ」

ほめられると嬉しい。わたしは宿題を夏休みの最後の日にやるなんて、かっこわるいことはしないのだ。

「うん！ あとね、プールに行つてー、マホちゃんたちとあそぶ約束だってあるし、ま……おかあさんと土曜日におでかけするんだ」

あぶない、家みたいにママって言うところだった。ママなんてちっちゃい子みたいで、外で言ったら恥ずかしいよ。

「ふふ、そうかあ。忙しいね」

いそがしい、の言葉になんだか大人っぽさを感じて得意げになった。

「そ。いそがしい、の。だから早く」

ふふん、とした気分で、ナカくんにおはなしをせがむ。

「じゃあ、シイちゃんが虹色のみずうみの中へ入ったところから……」

まわりには虹の色があふれていて、シイちゃんはその中をゆつくりと沈んでいくのです。赤、だいたい、黄色、みどり、青、あい色、むらさき……下に行くほど、暗い色にあふれています。

『さんびえか さんびえか』

不思議な音もどんどん大きくなるようでした。そうして、ふんわりとみずうみの一番下に着いたのです。そこには、ざわざわと揺れて光る虹色の海草がありました。

「これが、虹のもとかしら？」

と、シイちゃんが言う

『えか あー あー』

と聞こえていた音が変わっていききました。驚いてシイちゃんあたりを見回しますが、まわりはどこまでも虹色の海草が広がるだけでした。でも、音はまた変わっていったのです。

『ね こんにちは ね こんにちは ね』

というふうにも、おかしな「こんにちは」を言い始めました。

「こんにちは。だれかいるの？」

さつきと同じ、あたりには誰の姿も見えません。いったい、この音はどこからくるのでしょうか。

『よるよ いるよ』

とその音は言いますが、ここには虹色の海草しかあり

ません。じつとその海藻を見つめてシイちゃんは考えました。

「もしかして、あなたたちがしゃべっているの？」

ざわり、と大きな揺れが水の中を動かして、シイちゃんは転びそうになりました。でも、その時に虹色の海藻たちがうなづくように揺れているのをしっかりと見ました。

「すごい！　しゃべる海藻なんてはじめて！」

シイちゃんは目を輝かせて喜びます。

『あそぼ　あそぼ』

海藻たちはそう言って、ゆうらゆら揺れました。シイちゃんは大きくうなづいて

「うん！」

と言いました。

それからシイちゃんは、楽しい鬼ごっこをしたのです。虹色の海藻の一つがゆれたら、走ってつかまえます。すると、つかまった海藻からぶわりと色が出るのです。それは、黄色だったり、青色だったり、みどりの時もある……そう、虹の色が生まれて、明るい色は上へ上へのぼっていくのです。そして、その鬼ごっこのあいだ中、海藻たちは歌をうたいました。

『さんびえか　さんびえか　くわとろ　くわとろ　かん　かん　でり　きゃーれんよ』

短くて不思議に楽しい歌なので、シイちゃんもすぐにおぼえて一緒に歌うようになりました。

「さんびえか　さんびえか　くわとろ　くわとろ　かん　かん　でり　きゃーれんよ」

虹の海藻の中を走り回って、シイちゃんは満足しました。ごろんと虹の海藻の上に寝転がります。そうすれば、上にいくほどどんどん明るい色になっていく虹の水がよく見えてきれいでした。すると海藻たちは

『もっと　もっと　もっと』

と言うのです。これ以上走るのはシイちゃんには無理です。それにおなかも空いて、家に帰りたくなくなりました。その時、遠くの上の方から

「おーい」

と呼ぶ声が聞こえました。知っている声です。なんだかなつかしくて、シイちゃんももっと帰りたくなくなりました。

「もう帰らなくちゃ」

とシイちゃんは海藻たちに言いました。すると、海藻たちはゆうらゆうら震えて言います。

『だめだめだめ』

シイちゃんは海藻たちに、聞きます。

「どうして」

でも、海藻たちは

『だめ』

と言うだけなのです。

「もう帰るもん」

と言って、とうとうシイちゃんは立ち上がって、地面をけつて上を目指そうとしました。海草たちは

『いっしょ あそぼ』

と言って、シイちゃんの足を海草でからめて引つ張ろうとします。シイちゃんは、ほんとに帰りたくなって泣きそうになりました。するとまた上から呼ぶ声が出て

「おーい、シイちゃん」

「その声はマルタクんの声だ、ってことにシイちゃんは気づいたんだ」

ナカくんがみずうみを見つめながら、そう言って黙ってしまいました。今日のみずうみは、色鉛筆の一番はしっこ暗い色に近づいている。なんだか具合が悪いみたい。みずうみもあつくて、まいっちゃったのかも。

「マルタクんって、シイちゃんにいじわるした男の子でしょ」

ベンチに両手をつけて足をブラブラさせて、ナカくんに言う。

「うん。そうだね」

あのマルタクんが何をしようとしているんだろう。動かしていた足を止めて、ナカくんにつばい質問をした。

「どうしてマルタクんがシイちゃんを呼んでるの？ もしかしてウソついたことあやまりに来たの？ いじわるなのに」

そう聞くと、ナカくんはわざとらしく首をかしげて言った。

「さあ、どうだろう。また今度、おはなしの続きをするよ」

また今度って言うナカくんはにっこりしていて、わたしの方はがっかりした。

「えーっ、またあ？」

一回でおしまい、のおはなしの方がうずうずした気持ちにならなくてすむのに。こういう時に、いたずらが成功したように笑うナカくんにむつとする。

「次で最後だからね。お楽しみに」

ほら、あの笑い方。そんなことやっているとキライになっちゃうんだから。ぶいと横をむいて言つてやった。

「ナカくんもいじわるだ。わたし、マルタクんみたいないじわるする男の子きらい」

だって、いじわるするのは悪いやつだもん。先生だっ

て「いじわるしちやいけません」って言ってるし。

「そうかあ……まあ、嫌な奴かも知れないけど。でも、マルタくんはなんでいじわるしたんだろうね」

ナカくんの声ですこおし暗くなった。それで思わずナカくんの顔を見たけど、なんだか泣きそうな笑っているような、変な顔をしていて

「しらない」

としか、わたしは言えなかった。それで黙ってしまった、じりつとしたあつさが出てきた。ふと、みずうみを見れば、岸の近くが緑だらけになっている。アオコだ……むずかしいことはよく分かんないけど、アオコはみずうみの悪い状態だつてママが言つた。お魚とか、生き物が住みづらくなるらしい。アオコも悪いやつなんだ。それがなんでかなくて、しらないよ。

悪いやつなんていなくなつて、キレイになればいいのに。虹色のみずうみはきつとそんなやつはいない、キレイなところなんだろう。

「わたしも、虹色のみずうみに行つてみたいな。帰れなくなるのはイヤだけど……虹色の海草がほしい」

ぼーっとみずうみを見てそう言つた。すると

「じゃあ、次に会う時まで採つてきてあげよう」

と、なんでもないことのようにナカくんが言うものだから、びつくりして隣のナカくんを見る。

「え？　ほんとにあるの？」

だつて、これは「おはなしのみずうみ」でしょ。でもやっぱりナカくんは

「うん。『さんびえか』の音を探せばすぐに見つかるんだ。おっと……これはヒミツだよ」

と、ふつーに言つたのだ。ヒミツ、と口に人さし指をあてるナカくんは魔法が使えるみたいで、わくわくする。ぜつたいにだれにも言わない、という意味をこめて、わたしは二回も首をタテに振つた。それを見てナカくんは、ふふふ、と笑つてくれる。そうして、立ち上がると遠くを見て、ぽつりと云つた。

「雨が降りそうだ……」

「あめ？　わかるの？」

わたしもベンチからおりると、ナカくんの隣に立つた。ナカくんはなにを見てるのかな。

「ほら、みずうみの左の方から大きな雲がこつちに向かつてる。夕立になるよ」

そう言つて、みずうみの向こうを指さすナカくん。そこには、ほんとにモクモクおっきい雲があつた。

「ゆうだち」

ナカくんの言つた言葉をくり返す。見るまに、モクモク雲が空をぜんぶ食べちゃいそうになつていく。

「さあ、早く帰ろう」



ナカくんはわたしの手を引いて、いっしょに帰ってくれた。歩き出してすぐ、手のひらも、首の後ろも、べっと汗がひっついてきた。それがなんだか、後ろからなにか来るみたいに思っただけ振り向く。みずうみが、雲とおんなじになって、どこでちがうのか分からなくなっていた。「ゆうだち」って怖い。ナカくんの手をぎゅっと握った。

おはなしの最後をきくために、いつもの公園に行った。だけど、あれっきり何度行ってもナカくんには会えない。どうしたんだろ。ナカくんは約束をやぶったりしない……しないもん。せっかく来た公園のベンチにすわってみるけど、ベンチが広くてさみしくなった。それに、ミンミン、ミンミンとセミの鳴き声がうるさくて、今日が一番あつくて、サイテー。

誰も見てないから、ベンチに両足をあげて抱えてすわる。体育の時の座り方。これをスカートでやるとママが「ギョウギがわるい」って怒るんだけど。両足のひざの上に頭をのせて、じーっと前を見る。今日のみずうみは、遠くまでとつてもよく見える。向こう岸の建物の影が分かるんだ。そして、みずうみに浮かぶ島もとても近くに見える。だけど、ほんとはあの島はずっと遠いところにあることを知っている。ナカくんが教えてくれた。

泳いでもたどりつけないくらい遠いって。船で行かなくちゃいけないから、行きたいならいっしょに行こうって。それで、わたしが行きたいって言ったらほんとに連れて行ってくれた。近くの港から出る、みずうみを回る大きなお船に乗って行った。お船は、学校の校外学習で乗ったことがあるけど、島に行くのは初めてだった。その島には神社があつて、いくつも階段をのぼらなくちゃいけないんだけど、ナカくとゆっくりのぼった。ナカくんは体力がなくてすぐ疲れちゃうから。でも、その日は調子が良くてちゃんと一番上まで行った。今日みたいに、みずうみのずーっと向こうまでよく見えたから、わたしの家がどこにあるのか探して、とつても楽しかった。やつぱり、ナカくんは約束をやぶらない。だから、おはなしの続きだつて、虹色の海草だつて……あ。

もしかしてナカくんは虹色のみずうみに行つて帰つて来れなくなったのかも。だつて、おはなしの中のシイちゃんもそうだった。おはなしだから、最後はめでたしで、ちゃんと帰れると思つたけど。なにかあったのかも知らない。ナカくんをさがさなきゃ。虹色のみずうみはナカくとわたしのヒミツだから、だれもナカくんがどこへ行ったか知らないのだ。

ベンチから立ち上がって、みずうみに向かった。みずうみのどこかで『さんびえか』の音が聞こえないか、さ

がすために。公園からみずうみはすぐ近くだ。車が通る大きい道路をわたって、コンクリの階段をおりればいい。大きい道の横断歩道の信号が変わるのを、早く早くと足ぶみして待った。青になったら走って渡って、すぐに階段をトントンおる。おりた先は、でこぼこの石だらけで背の高い草が生えてたり、ひよろひよろした木が根っこをのびしてたりして、こげそうになる。しばらくみずうみに沿って、その歩きにくいでこぼこ石の上を行く。みずうみに一番近づくには、道路の下を流れてきた川とつながったとこまで歩かなくちゃいけない。そこから、みずうみの上までのびたコンクリの細長い台がある。よく魚釣りをしてる人がいるところ。

「そんなところで何してるんだ、危ないぞ」

低くしわがれた声が後ろからして、びくりとして振り向く。ポロボロの黒い靴をはいた足が見えて、こわごわ上を見上げる。日に焼けた黒い肌のおじいさんが、目を細めならむようにこつちを見ていた。

「えっと、あの虹色の……」

いけない。これはナカくんとのヒミツなんだから言っちゃだめ。もごもご声が小さくなって話をやめてしまったわたしを、おじいさんがだまって見ている。その目が怖くて、あとずさると走って逃げた。おじいさんがいる方へはいけないから、道路の方に走るけどそこに階段は

ない。だって、階段はもっと歩いてきたとこを戻らないとないんだから。でも、目の前に、みずうみとつながった小さな川が道路の下を通って、トンネルみたいになってる。とにかく追いつかれないように、そのトンネルにかけ込む。川の横には狭いコンクリの通れるところがある。おじいさんは背が高いから、このトンネルに入れないはず。

トンネルに入ったとたん、暗くなって見えづらくてまたたきをした。でも、トンネルの中は真つ暗じゃなくて、奥の出口の光が見えている。川に落ちないように気をつけて、右手でかべをさわりながら進んだ。冷たいかべになんだか泣きそうになる。出口に近づけば早く明るいところに出なくて、だんだん早く足が動いた。

やつと外の光の中にもどってきた時には、百メートル走をいっしょうけんめい走ったぐらい心臓がばくばくしていた。トンネルの中と違って、草がぼうぼうと生えた川の横にすわりこむ。川が、大きな道より下にあるから、まぶしい太陽がいつもより遠くに感じた。息を吸い込んだら草のおいが入ってきて、むっとしたあつさと同じくらいイヤな感じだった。なにをやってるんだろう。ナカくんをさがしにいかなくちゃいけないのに。がんばらなくちゃ。そう思って立った時に、緑の草の中でも目立つ真つ青なものを見つけた。近づいてみる

と、それはプラスチックのバケツだった。だれかがここに忘れたのかな。トンネルの手前に転がっているそのバケツを拾ってみる。どこもこわれてなくて、ちよつと土で汚れてるくらい。さつき、このトンネルから出た時はぜんぜん気づかなかつた……。

『さんびえか』

とつぜん、音が、聞こえた気がした。まさか……この音は。青いバケツを持ったまま、じつと音がもう一度聞こえないか待つ。

『さんびえか』

はつきりと、その音は、みずうみに続くトンネルの中から聞こえていた。知っている音。聞いたことはなかったけど、知っている。「さんびえか」の不思議な音は虹色のみずうみに行く時の音だ！ わたしはバケツを放り出して、走り出していた。このトンネルのむこうで、みずうみが、虹色のみずうみが呼んでいる。さつきはあんなにこわごわ進んでいたトンネルの中がまったくこわくなかった。暗いトンネルの中に、わたしの足音がひびいて、向こうからやってくるみずうみの波の音と『さんびえか』の音がいっしょになって駆け抜けていく。それから、それから！ 冷たい水がわたしの顔をぬらして、あたたかいなかに包まれた。目をぎゅつと閉じて……開くと、そこは虹色のみずうみだった。

虹の色の中にゆつくりとしずみながら、すぐく嬉しくてほつとしていた。よかった、ちゃんと虹色のみずうみはココにあったんだ。ナカくんはきつとこのみずうみにいる。見渡すと赤色がどこまでも広がる水の中で、赤の次はだいたい色の水、黄色、みどり、青、あい色、紫……下に行けば行くほど、虹の濃い色になっていく。そして、一番下に虹色の海草がある。そう思って安心していった。

『さんびえか さんびえか』

大きくなっていく不思議な音もこちよかった。だけど、青色の中に入った時、よく目立つ白い人が見えた。

「ナカくん！」

見まちはえるはずがなかった。いつもの白い肌、青の中にいるせいか青白く、顔色がわるい。わたしの声が聞こえたのか、ゆつくりとこつちを向いて、おどろいた顔をした。

「レーコちゃん？ どうしてここに」

がんばってナカくんの方に手をのぼせば、ナカくんも手をのぼしてわたしを引っぱってくれた。

「わたしね、さがしにきたの！ ナカくんがいなくなっちゃったから！ おはなしの最後まで聞いてないのに！」

「そうかあ……ありがとう」

ナカくんはやさしく頭をなでてくれる。それから、ポ

ケツトからなにかをとり出して、差し出した。

「これ、虹色の海草？」

細い線がカクカクと色んな方向にのびてて、それは虹色にかがやいている。小さくてやわらかいサンゴみたいだった。

「うん。とって来たんだけど、このみずうみがあんまり綺麗だから長居しちゃった。僕、この青色が一番好きなんだ」

ナカくんからもらった虹色の海草を手になぎる。ナカくんがいちばん好きって言った青色は、よく見ればあの真つ青なバケツにも、雲ひとつない青空にも、透明で落ちてくる病室の青にも似ている。わたしの知ってる、どの青もこの中であつた。

「ここにある全部の青が、虹色の中にもあるんだ。他の色だつてそうだ。そう思うと、ほんとうに何もかもが、このみずうみにある気がして……それなら、この綺麗なみずうみに僕もあればいいのにつて」

そう悲しそうに笑つたナカくんは、もつと顔が青白くて、この青の中にとけてしまひそうだった。そんなのはイヤだ。ナカくんはいっしょにいてくれなきゃイヤだ。

「帰ろう、ナカくん」

ナカくんの服を強く引っぱる。どこにも行かないように。

「うん」

につこりとナカくんは笑顔でうなずいた。でも、おかしなことに、わたしの引っぱっていた服のすそはどこかへ行つてしまった。ガラガラとどこか遠くで低くひびきわたるような音が鳴る。

「またね、レーコちゃん」

いつものみずうみが見える公園がぼんやりと浮かんでいて、ざーざーと雨の音ばかり聞こえていた。「夕立だよ」と言うナカくんの声があった気がする。ゆらゆら、わたしの体はゆれて、あたたかいものの上にかぶさっているようだ。

『さんびえか　さんびえか　くわとろ　くわとろ　かん　かん　でり　きやーれんよ』

あれ……？　わたしはまだ虹色のみずうみにいるのかな。ああ、でもだれかが、わたしの足と腰をしつかり支えてくれているんだ。そう、だれか……。

「さんびえか　さんびえか　くわとろ　くわとろ　かん　かん　でり　きやーれんよ」

はつとして、頭を起こした。しわがれた低い声は、聞いたことのあるものだった。目の前にあるその人の肩をつかむと、ぐらりとして急に見えている景色が低くなる。

「……起きたか。ここなら屋根があるからな。ほら、よしよっと」

わたしは、なぜかあの、みずうみで会って逃げて来たおじいさんにおぶさっていた。背中からおろされて、あたりを見回すといつもの公園のすみっこにある休けい所だった。屋根があつて、ぬれないとこだ。

「なんで……その歌をしってるの」

びしょぬれの真っ黒なカサをたたんでいる、おじいさんを見上げてたずねる。虹色のみずうみのおはなしは、ナカくんとなつただけのヒミツなのに。

「虹色のみずうみの話はな、わしがあの男の子に教えてやったからさ」

カサを休けい所のイスにひっかけて、おじいさんはなんでもないことのように言った。それから、ゆつくりとおじいさんはイスに座る。

「えっ」

おどろいたわたしは、その場に立ちつくしていた。『あの男の子』って、ナカくんのこと？ でもなんで、なんで？ おじいさんはナカくんと仲良しなの？

「さて、わしが『おはなし』の続きをしてやろう」

聞きたいことがいっぱい頭ん中がぐるぐるしていたわたしに、さらにおじいさんがそう言った。すわりな、とおじいさんがイスを指すのを見て、ためらっている

と、ガラガラドンッと大きくひびくカミナリの音が鳴った。あわてて、おじいさんの近くにすわる。ゴロゴロ、ゴロゴロ、カミナリがどこかを目指してうなっている。今、ピカッて光った。

「大丈夫だ」

おびえるわたしに、おじいさんが優しく頭をなでくれた。それから、わたしの目を見ながら、おはなしの続きを話し始めた。

「シイちゃんが虹色のみずうみの中で、マルタクんの声を聞いたところからだつたな……」

・

「おい、おい。シイちゃん、どこにいるんだー？」

どうやらマルタクんはシイちゃんを探しているように感じた。シイちゃんは、声の聞こえる上に向かって、大声で答えました。

「ここにいるよ！」

シイちゃんの大声が、ざわざわと虹色の海草たちをさざめかせました。シイちゃんを引きとめようとして足を引っ張っていた海草もざわりと離れたので、シイちゃんは思いっきり底をけります。ふっと浮いた体は、ガラガラドンッ、ガラガラドンッとなにか大きなもの

が崩れるような音にぶつかりました。びっくりして目をつぶれば、今度はシイちゃんの右腕を誰かがぐいと引っ張ります。ぼしゃり、シイちゃんは水の中から飛び出しました。

「なにしてるんだよ、危ないだろ！」

と言って、そこにいたのはシイちゃんの右腕をつかんだマルタクくんでした。シイちゃんはみずうみの浜辺で座り込んでいます。

「虹色のみずうみに行ってたの。マルタクくんが教えてくれた通りに、虹はみずうみの中にあつた！」

みずうみから帰れた嬉しさと教えてくれたマルタクんに会えた嬉しさで、はずんだ声でシイちゃんは話します。それを聞いてびっくりしたのはマルタクくんです。だって、みずうみに虹があるのはウソだったんですから。驚いて黙ってしまったマルタクくんを気にもとめずに、シイちゃんは服に引っ付いていた海草を見せました。

「見て見て！ これ、虹の海草だよ！」

でも、その海草は枯れ果てたように赤茶けたくすんだ色の、虹色とは全くかけ離れたものだったのです。

「なんだ、そんなただの汚い海草じゃないか」  
マルタクくんはバカにしたように、そう言います。

「もったきれいだつたのに……」

と、シイちゃんはがっかりしてしまいました。マルタ

くんは

「早く帰らないと夕立が来るぞ、さっきから雷が鳴ってるんだ」

と言います。言われてみると、遠くの方でゴロゴロと雷が鳴っています。

「うん」

と、シイちゃんは答えました。でも、虹色の海草がなくなってしまうって残念で悲しくて、うつむいて変わり果てた海草をじっと見つめていました。すると、ぼつりと雨が降ってきて海草の上に落ちたのです。しつとりと雨にぬれた海草は、あのみずうみの中と同じように虹色に輝き出します。マルタクくんは動こうとしないシイちゃんのそばに来て、その手の中をのぞいて驚きました。ぬれた海草は生き生きと虹の色をしていて、それはこの世のどの色よりもきれいでした。それを見て思わず、マルタクくんもぼつりと言いました。

「……僕も虹色のみずうみに行きたい」

シイちゃんは、にっこり笑ってマルタクんに言いました。

「いいよ、今度はいつしよに行こうね！」

「おしまい」

おじいさんが話し終わる頃には、雨はすっかり上がっていた。むわむわと夏のあつさが戻ってくる。セミもミーンと鳴き始めた。すっかり、いつもの公園だ。

「あいつは具合が悪くてしばらく入院するそうだ。長く待たせることになるから、話の続きを代わりにしてやって欲しいと頼まれたんでな」

ああ、ナカくんのことを話してるんだ。入院と聞いたとたんに、とろりとろりと青が心にたまっていく……おばあちゃんとおんなじになったら、どうしよう。心が重くて、重くて、しかたがなかった。おじいさんは、そんなわたしを見てまた大丈夫だと言うように頭をなでた。

「……あと、これだ」

ぼんやりと聞いていたわたしに、おじいさんがなにかを差し出した。その手には、赤茶けた地味な海藻がある。もしかして、これ……。そっと、その小さな海藻を受け取った。小枝みたいに細い線をいくつもいろんな方向にのびしている海藻で、すっかりカラカラにかわいてしまっているようだった。

「よっこいせっと」

おじいさんがそう言って立ち上がる。イスに引っかけていた傘を持つと、わたしが手の平に持っていた海藻の上でふった。パラパラと傘についていたしずくが落ち

る。すると、しずくをいっばいにかぶった海藻は、あの赤茶けた色はどこへ行ったのか、きらきらした虹色になった。宝物にして使わずにしまっている特別なオーロラの折り紙みたいな、そんな虹色に。

「あー！ 虹色の海藻だ！」

嬉しくて、そう叫んだ。おじいさんの顔を見ると、にやりと笑っている。いたずらそうな目が光る、その笑い方はナカくんに似ていた。

「ありがとう」

わたしがお礼を言うと、おじいさんが口をゆがめて何か言いたそうな顔をした。

「どーしたの？」

わたしはなにかわるいコトをしたっけ？ お礼を言っただけなのに。

「……いや、なに……笑った顔が、ワシの知っている人によく似ていると思うだけさ」

そう言って、おじいさんはそっぽを向いてしまった。やっぱり怒ってるんじゃないかと思った時に、おじいさんが大きな声で空を見て言った。

「ほう、虹が出てるぞ」

おじいさんの言うとおり、晴れ上がった青い空で、うすい虹がぐるりとみずうみの上にかかっていた。本物の虹は、きえそうなほど空にとけかかっている。あの虹

も、とけてきえて、虹色のみずうみに帰っていくんだ。  
そうして、また雨がふったあとに会えるの。わたしは虹  
がなくなるまでずっと空を見ていた。

— ひなこ・さや 2015年度卒業生 —